# 序

日蓮上人を謂ふもの、近時漸く多きを致さんとす、是れ國家の祥事也、上人既に自ら我れ日本の柱とならんと誓ひぬ、然かも日本國は久しく既に此柱を捨てゝ顧みず、予は之を痛慨して止まざるもの也、上人は正像過時の遺教を以て、佛意に叶き人生に迂なる死法なりと斷じ、純ら唯一佛乘の法華を主張して、如來の本懷、時代の救護と爲し、靈活高妙の神解、克く深遠の佛法をして現實主義の活教たらしむ、是れその自ら紫雲堆裡蓮華座上の菩薩たるを甘んぜずして、生海の船筏たり國家の柱石たることを聲言せる所以也、故にその宗風、

明治
38 3 4
内交

全く尋常衣鉢子の事に似ず、空論の佛法を去て、實際の佛法に就き、消極的解釋を祛けて、積極的解釋を取り、空想を排して、身讀を奬め、封建的佛教を破して、統一的佛教を建立し、厭世主義を斥て、現世主義を賞揚し、權實雜亂を呵して、大義名分を主張する等、一代の言動、渾て回天の活氣を以て之を貫く、その理想は、闇を破して明に就くに在り、死を轉じて活と爲すに在り、其氣宇や、大也、高也、正也、剛也、直也、其抱負は、世界を打て一佛國土と爲さんとするに在り、日本を以て世界の柱と爲し、自ら以て日本の柱となる、是れ既に人生無上の力にあらずや、而して其柱の材は、則ち唯一



佛乘法華の無上眞理也、而かも今の日本は、柱の內容を議するの前、先づ柱ありや否やを考ふべき時代也、世間が上人內證果海の妙を味ひ得んことは、尙現代想界幾多進步の後ならざるべからず、只方さに今の急とする所は、先づ上人の人格を景仰して、活動的國民の唯一模範と爲すに在り、蓋し上人絕倫の性格は、天圓地濶、該ねざるなく載せざるなし、諸の善本德源、渾焉として一身に備る、仰て範を取る、人生至要の標準、一も缺く所なし、且つその持するに金剛不壞の堅忍を以てし、行るに炎々熱烈の信念を以てする所、殊に現代墮落の民風を濟ふに於て、尤も深く其要を見る、否極て泰を生

す、近ごろ頻りに上人崇拜の聲を耳にす、是れ豈國家將に昏睡より起たんとするの兆にあらずや、夫れ人格崇拜は即ち主義崇拜の由漸たり、所謂道に至らんとして先づ魯に至れるもの也、我れ此意味に於て、諸の日蓮上人崇拜論を歡迎す、頃ろ新聲社主佐藤橘香君、現代青年の浮薄を慨し、爲に修養の資を與へんとして、こゝに呦鹿庵主人著す所の英勇僧日蓮を刊行せんとす、山川智應を介して、予に一言を題せんことを需む、予辭せず欣然として爲に隨喜の言を布く。

明治三十六年三月九日祖敎上奏紀念の日之を記す　田中智學



## 序

鉦の聲は鏘々たり、陰鬱なり。木魚の響は戛々たり、幽寂なり。俱に悲惻の音なり、厭世の音なり。唯太鼓は鼕々たり、勇壯なり、生氣充ち、活氣充つ、怡悅の音也舒暢の音也、發越の音也、突進の音也。日蓮あつて法華あり、法華あつて太鼓あり、此太鼓あり、以て法華の宗義を見るべく、以て日蓮の爲人を想ふべし、唯、日蓮のみ法華を開くべく、唯、法華のみ太鼓を用ゆ可し、

此說を以て『英雄僧日蓮』の卷頭に叙す。未だ識らず呦鹿庵主之を首肯するや否やを。

明治癸卯歲二月、烏城法華宗蓮昌寺峰の僧居に之を草す。　田岡嶺雲

## 呦鹿庵主人足下

日蓮を論ずるものは必ず之をマホメットに對比す、マホメットト雄なるか日蓮雄なるか、暫く之を云はず、余は其戰爭主義者たるに於て、共に同一の崇拜心を有せり。今、足下の熱情を以て英雄僧日蓮を傳し且論ず、余は足下が目下起稿中のマホメット論と他日併せ視んを希望す。

發卯三月三日

開酒に赴する前二日

於東都　鯉洋白流記



## 序

誰か反抗を以て濫に惡となすや。

反抗は正しく進歩の有力なる監視者也、若くば、曲れるを正しきに返す修正機也、反抗にして、若し堅固に强盛にあらば、彼れの價値は、寧ろ順道を行くものゝ偉大に勝る幾重ならざる可らざる也。

世界の列强と相對せるナポレオンの偉大を精思せよ。暴慢なる法王と相對せるルーテルの偉大を凝視せよ彼等の力は、確に反抗の價値を表現せるものと言はざる可からず。

日東の國また日蓮上人あり、

余は、未だ日蓮の研究に多くを費せるものにあらず、故に余の日蓮を崇拜するの一念、また世の宗教者流、哲學者流の如くなる能はず。他なし、余は眞に一個反抗精神の權現として、日蓮尊重の意を盡

すもの也。

今『英雄僧日蓮』出づ。年來日蓮の人格、能力に向て深き研究を積める靈犀なる眼光と雄健の文とを以て英雄評論の筆に長けたる、抑も亦雲霧を待つの豪傑を以て自ら任ぜる、知友池元呦鹿庵君の手に依て、玆に『英雄僧日蓮』出づ。

人心徒に皮相の平和に戀々として、勃如たる向上の元氣なく彎曲を彈くの熱血なき今日、此の『英雄僧日蓮』の敎ふる所、豈に夫れ少小ならんや。

余は、呦鹿庵君の此の篇を草する所以のもの、唯だに日蓮を傳ふるにあらざるを知る。又此の書は、日蓮の皮を描かず、肉を描かず、筆一呵、直に其骨髓を描かんとせるものなるを知る。余は此の書に依て、大に日蓮の骨髓を學び得反抗精神の價値を更に能く信じ得たるを自ら深く喜ぶもの也。

三十五年二月

藤田湖山



# 卷頭語

大膽なるかな、予は、予の、『英雄僧日蓮』を草し了つて、自から其大膽なりしに慄然たらざるを得ざる也。日蓮を知らずして日蓮を議す、天下これより大膽なること無かる可し。故に此編は日蓮論と云はむよりは、寧ろ呦鹿庵一個が擅に假想せる英雄僧論と云ふの適切なる可きを信ず。世人亦た須く、此觀を以て本編に對す可き也。

有体に白狀すれば、予は始め日蓮に對して何等の趣味も興味も持せざりしもの、嘗に然かりしのみならず日蓮なる語を見聞する毎に、予は甚だしく不快の念を惹起するを禁し得ざりき。『日蓮』の二字は『穢多の兒』てふ四字を意味し、穢多の見てふ四字は穢汚、冷血、慘忍、苛酷、癩病、腐蝕、と云へる如き極めて惡感を催ほさしむるものゝみを聯想せしむるにあらずや。獨り予に限らず、社會

の善男善女、亦予輩と日蓮觀を同ずるもの決しで尠からざる可し。念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の聲の如何ばかり陰餡にして惡風を惹起するよう祖是なき予の幼年時代に於て、予は此聲を目じて人の世を害ふものと斷ぜざるを得ざりき。然れども予は、年と共に人の世の餘りに平凡なるに、殆むと倦み疲かるいに於て、戰爭主義を應面なく發揮せる彼の四大格言に屢々耳をかすを厭はずなりたる也。悲哀の響を以て本能とせる總ての佛教音樂中に在て、獨り豪壯雄渾の音に人の世を鼓舞するもの、是れ妙宗の音器に非らずや。

予は極端なる厭世的思想を懷くもの也、如何なれば人の世の此くも敢果なく味氣なく越味なきやを染々嘆うもの也、然ども今にして身を塵外に脫し去り心を名利線外に離却し去るには餘りに浮世に對する未練多きを覺うるもの、茲に於てか、予の厭世主義は轉じて憤激主義となり再轉して折伏主義とはなれり、こは勢の誠に已む可からざるものたる可し。既に憤激主義の人となり戰爭主義の



者となる、妙宗音樂の戰鬪的にして雄渾に、人心を鼓舞するものあるに敬意を拂はざる能はず。

爾り、妙宗の音樂は、浮世の平凡主義に倦み疲れたる予をして日蓮を懷はしむるの聯鎖となりたり。其後、南の方三百里、狂濤岩を嚙む橘の小戸の檍ヶ原、一葉ヶ濱邊に身を養へりし時、思はずも『高祖遺文錄』數十卷三百餘章を閲し了つて、予は予の畏敬す可き偉人の、死せる古聲の上に滿面血を濺いて、人の世を熱罵せるを見、予は心の躍るを禁じ得ざりき。其夜、雲黑く海黑く、幾條の電波上を翔りて空鳴ること頻り也、海水怒て天を呑まむとし、岸は碎けて紫電燃ゆむとす。想ふ是れ天魔の百鬼を率ゐて人の世を咒はむとするもの歟、破壞神の魔王に鞭て人の國を襲劫せむとするもの歟、天地の大呼吸、海魔の大咒詛、嗚呼何ぞ夫れ豪壯痛快を極むるや。惡國惡王の咒語も、四大格言の罵聲も、共に山河百里に響き亘りて、机上の高祖遺文錄幾十卷、今や活きて聲あるに似た

り。

此くの如くにして予は七百年前の英雄僧日蓮を憶はざる能はざりき。天地の大咒詛者、戰爭主義の大鼓吹者、父母の國を熱罵して惡國惡王惡臣惡民のみと一喝し去りたる穢多の兒日蓮、國土に惡鬼踊り惡疫人を斃し井水涸れて五穀稔らずと咒ひ去りたる惡遺傳の日蓮、嗚呼これ海王の天に嚙くが如き概あらずや、嗚呼これ天魔の百鬼を率ゐて虛空に戰ふの概あらずや。再ひ高祖遺文錄を繙けば、滿卷悉く血也、悉く熱也、若し夫れ犯す可からざるの威權に到ては戰宣の布告も遂に及ぶ可からず。予は予の憤激主義と折伏主義とに於て、日蓮の文の愛讀者たらざるを得ざりきと共に、日蓮崇拜者たらざるを得ずなりたる也。然れども、予は今日に到るも何日蓮を知らず、唯だ一時の感興は、予をして自由に日蓮を假想せしめたるもの而已。之を以て本編說る所の日蓮や、予が癖ある趣味の上に想像を逞うしたる日蓮にして、決して妙宗の所謂日蓮上人に非ら



ざる可しと云へども、予は予の想像の爲に化し去りたる日蓮の上に、眞に多大の崇拜を拂ふものなるを奈何せむや。左れば妙宗僧侶の此編に對して予の僧越を咎むることありとするも、予に在ては風馬牛たらざる可からず、予の想像せる日蓮は實に此くの如くにして而して之を外にして予は日蓮に對する寸毫の趣味も敬意をも有せざれば也。然しながら日蓮を識らずして日蓮に筆を染む、予は自ら予の大膽に慄然たらざるを得ず。

明治癸卯二月中旬　　吻鹿庵主人記

附して云ふ、此編は過ぐる三十五年の春脫稿せしものなりしが、偶友ありて、高山博士の日蓮論某件錄より出版されんとする由を告げゝれば、不文予の稿の如き到底燈前の螢火に過ぎざる可きを思ひ、其儘笈底に投下去りたりしもの也、今や博士長逝して日蓮を論ずるもの眞し、誰かまた彼僧の爲め萬丈の氣焰を吐くものぞや。

# 英雄僧日蓮

## 目次


第壹編　惡時代反抗の聲とは何ぞ……一
第貳編　清澄寺に於ける英雄僧日蓮……八
第參編　伊東流罪前後に於ける英雄僧日蓮……二五
第四編　龍口前後に於ける英雄僧日蓮……七〇
第五編　佐渡流罪中に於ける英雄僧日蓮……九二
第六編　山林に遁れたる英雄僧日蓮……一四二
第七編　神の下に眠りたる英雄僧日蓮……一六七




# 英雄僧日蓮

吻鹿庵主人

## 第一編　惡時代反抗の聲とは何ぞ

今の世は亂世と申して亂れて候也。

＊　＊　＊

惡國惡王惡臣惡民のみ有て國土に惡鬼亂れ白法隱沒せる上弟子また闘諍堅固邪師邪法は崇重せられ善師は遠けらる。

＊　＊　＊

我を罵らむ國土には魔來り鬼來り疫病盛に流れて死人の屍山

をなし、野を埋む、之を是れ奈何せむ。

＊　＊　＊

諸有の井泉悉く枯涸し、苗稼悉く皆な枯死し、日月忽て光を放たず、星を降し、血を流す。嗚呼これ濁世の我を罵るゝが故に非らずや。

＊　＊　＊

ア、毀らむ人には彌よ申し參ゐらす可し、命長らへておはさば御覽ある可し。

＊　＊　＊

日蓮に怨を爲すものは、先づ必らず無間地獄に墮ちなむ。

＊　＊　＊

斯かる法門、日蓮を除いては、一人たりとも申し出づるものある可からざる也。

＊　＊　＊



天來の福音乎、地涌の魔語乎、時を尋ぬれば、末法濁世の始め、地を案ずれば唐の東、竭の西、陰々たる咒語は、鬼神の氣を帶びて、一代の人心の根底に響き渡りぬ。

嗚呼、此斷片なる語を耳にして、誰か惡遺傳の血液の鼓動せる一大魔王を想起せざるものぞ。帝王も之が爲めに戰慄し、國士も之が爲めに恐怖し、國臣も國民も之が爲めに無限の畏縮を來す。而して其畏縮と惡怖と戰慄の裏面には、一個偉大の魔王日蓮なるものゝ、滿面血を灑ぎて活躍せるを想ふを禁ずる能はざる可し。

彼や實に、一代反抗の狂兒なりし也。彼が全身には惡遺傳の血液循環し、彼が口には國土を咒ふるの熱罵迸出す。彼は恰かも血赤色の旗を舞して、海上に號

令す可く、怒濤沸立つ荒暴の中に狂ひ回りし海賊の如し。彼が新異現は此魔王主義の上に、彼が新版圖は此戰爭主義の下に、樹立され開拓され、號呼され鼓呼されざる可からざりし也。而して彼は之を敢行し遂行す可く、そが活歴史の總てのページを捧げて、血赤色に塗染するの惡運命を有したりき。

彼れ、當代日本を罵りて云く、之れ惡國惡王惡臣惡民のみ、と。之れ惡鬼亂るゝ惡國土なるのみ、と。

惡鬼亂るゝ惡國土歟、惡王惡臣惡民の跳梁を逞うする惡國土歟。何ぞ夫れ其罵言の痛快なるや。爾り、日蓮は之を布演して、猶ほ叫むて云く、我に怨を爲すの國土は先づ必らず無間地獄に墮ちざる可からず今や日本國の万乘聲を一にして我を呪殺せむとす玆に於て天地日月帝釋瞋恐して或は星を流し或は井水を枯涸し或は死人を出して屍は野に堆く血は河を染め盡して餘りあらしむ、日本國の亡ふる、夫れ近きに在る可き歟、と。こは是れ、彼が六十年の活歴史を通して發揮されし所謂日蓮主義なるものゝ、據て來る最初の罵言なると共に又ね最終の罵言なりき。



彼は此の惡時代反抗の一大痛罵を樂器として其が先天的の運命なる魔王主義を、最も大膽に、最も公明に、最も突飛に、世に示したる也。世は、更らに惱れ更らに驚き、而して彼は愈々猛烈に益々熱心に、彼自身が標榜せる魔王主義を發揮することに忠實なりし。

彼は先づ、彼れ自身を以て、法華經の行者也とし、釋尊の再現也とし、毀らむ人々には彌々申し參らせむと呼號しつゝ、更らに、日蓮に怨を寄せむ人々は先づ必らず無間地獄に墮ちなむと喚びぬ。何を以て彼れ法華經の行者なるを自から許すや、云く、佛の預言によつて出現したれば也、末法濁世の五百年、必らず此經の鼓吹者出現しなむとは、釋尊の云へりき預言に非らずや、地を窮ぬれば、唐の東、羯の西、此に一大天使の天降す可しとは佛教史の明かに記す

處に非らずや、と。彼出現せずむば、預言者の預言、遂に虛空に消亡するを奈何せむ。

日蓮は、此預言を、佛法八万四千の反古堆裡より發見し、而して彼自身佛敕を蒙りて天降せしものなることを、世に語る程の大膽を持したりき。故に彼に恨を寄せ、彼に仇せむものは、直に以て佛法の敵也とは、彼が天下に發せるの宣言也。

日蓮は、最も極度迄に發展されたる無限の威權と無限の壓迫力と無限の意氣とを持したり。之を以て、恒に强力なる敵を求めずむば已まざりき。權門權敕を非定する四大格言、大は即ち大なりと云へども、彼が眼目は、寧ろ之に非らずして、惡國惡王に肉迫を試みむとするにありたりき。

彼が向ふ所には、來往する三万里の怒濤、悉く皆な沫立てり。彼は茲に一新版圖を發見し、荒暴の海上に無限の號令を發す可く、大魔王と化し去りぬ。彼が



歷史の各ページは悉く血を以て記され、世界の有うる戰慄は、彼に對て灑かる。嗚呼、彼や佛敕を蒙りて天降したるの天使乎、惡遺傳的血液の澁滯する穢多の兒乎、彼が持する歷史の何ぞ夫れ血に染みて、彼が發する聲の何ぞ夫れ魔氣を含めるよ。

# 第二編　清澄寺に於ける

## 英雄僧日蓮

諍鬪主義の一大權化、東洋のマホメットとしてルーテルとして若くば教界のバイロンとして有うる惡國惡王惡臣惡民に大反抗を試み、毀らむ人には彌々申し參らせつゝ、難易兩道を横斷して、玆に光明の一大樂園を開拓したる彼れ英雄僧日蓮の業、亦た偉ならずや。而して此偉大なる天使の言に耳を傾け、所謂惡時代反抗主義の皷吹に讃美なさむとするものは、同時に次のページを繙かざる可からず。次のページとは何ぞ、彼が生涯の歴史也、彼英雄僧日蓮が生涯の歴史也。

日蓮主義は、日蓮が生涯を通して發揮されたる、一種の惡魔主義なりき。抑も此惡魔主義は、如何なる彼の生涯によつて產み出されたる乎。何人も戰慄する



なる惡魔主義を、天下の高儒碩學が稠坐せる覇府の中央に於て、敢て皷吹し傳道し說敎するを憚からざりし彼が生涯の歴史や如何なりけむ。若し夫れ、平和主義者の生涯が到て平和なりきとせば、諍鬪主義者の歴史は勢ひ諍鬪的ならざるを得ず。左らば彼日蓮が生涯の歴史も亦た悲慘なる日記の綴られたるもの以外に脫し去る能はざる可し、頭の坐頭の傷斯くの如きは彼が生涯の如何なるページに在ても吾人の歴々散見するを禁し得ざる所に非らずや。惡國惡王惡臣惡民のみと大痛罵を放ち、日蓮に非らずむば斯くの如き法門申し出づるもの一人たりともある可からざるなりと咆哮せし彼が意氣は、其生活歴史の各ページ毎に、深く血痕を印せずむば止まざりき。

此悲慘なる歴史を繙き、血痕の深く印せられたる每ページを通じて英雄僧の片影を見むと、最も趣味あるものならずや。而して彼の生涯の前半は收めて清澄寺内に於ける生活に在るが如し。後年、血赤色の旗を敎界に飜へし國民の心鑑

に號令したる彼は、恰かも黑雲深き處に龍兒の潛伏せるが如くに、清澄寺内に呼吸したりき、安房國長狹の郡東條の鄕のかたほとり、小湊が濱に臨める千光山清澄寺は、此一大英雄僧を出現せしむ可く最高の榮譽を天授なしたりき也。清澄寺以前に於ける日蓮が血統に就ては、雜多の說ありて、何れか眞なりや俄かに判す可からざるが如し。或は穢多の兒と云ひ、漁夫の兒と云ひ、甚だしきは、

日蓮大菩薩、性は三國氏、父は遠江國の大守貫名の重實が二男重忠なり。日蓮は第四の子、聖武皇帝の末孫。父は遠江より安房國小湊の沖に放たれて漁父となれり。母は清原氏、恒に朝暾に對て念誦す、日天胸を照すと夢に見給ひて妊り、本朝八十五代の帝後堀川院の御時、貞應元年壬午二月十六日午刻に生れたまへり。

と云へり。聖武皇帝の末孫云々の如きは恐らく附會の說ならむかし。彼が後年



に爲したる歷史に徵するも、其歷史の各ページが如何ばかり悲愴なる記述によつて充されつるかに徵するも、彼が四肢を通して鼓動せる血管中には慥に穢多の兒と云へる惡血液を混したりしは、炳かなる事實なる如し。穢多の血統を有せざる限り、歷史の總ての各ページを此くも血赤色に染め得るものに非らざる可し。世界に於ける諍鬪主義の皷呼者を以て任じたりしバイロンの如きに在ても、其血統は甚だ怪しかりしに非らずや。彼の祖先は元とベールン族と稱せし海賊の最も强暴なるものゝ一人なりしと云へり。此惡遺傳性は一個白面の美少年バイロンを驅つて血痕淋漓たるページ中のものたらしめしが如く、穢多の兒若くは漁夫の兒と云ふ一個惡血液の遺傳は同じく敎界の惡魔主義者たる日蓮を驅つて悲慘のページ中のものたらしめしに非らずして、何かあらむ。

惡遺傳の血液が恒に其人の生涯を驅て、惡遺傳的運命の下に醜弄し盡すは、何人も認むる所なる可し。バイロン、此間の消息を、フアエルをして言はしめて

曰く、我惡時に生れ我血統は我をして無禮を得せしむる所の知事とはなしたりと。日蓮をして悲慘の歴史を作らしめしもの、其穢多若くは漁夫たるの遺傳的血液を有したりしに因るや必せり。然りと云へども當時は階級制度の最も極端に達せし時代なるを以て、從て穢多の兒漁夫の兒と云ふが如きは、人間以外に冷視されざるを得ざりき也、穢多若くは漁夫の口を籍て發せらるゝものは、如何なる眞理なりと云へども、世をして耳を傾けしむるに足らざりき、日蓮が祖先を目して聖武皇帝の末孫なりと吹聽するが如きは、世をして日蓮の言に耳を籍さしむる上に於ての、最も有力なる方便に過ぎざらむ。其

釋迦如來は二月十五日に涅槃に入りたまひ、二千百七十一年後の二月十六日を以て日蓮上人誕生ありたり。是れ釋迦如來の再現なればなり。

と謂ひ傳へ、若くは日蓮自身にも、亦

法華經第七に曰く、我滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に廣宣流布し



て、斷絶せしむること無けむ云云我れ一者歎て曰く、佛滅後既に二千二百二十餘年を隔つ、如何なる罪業に依て佛の在世に生れざる、正法の四依、像法の中の天台傳敎等にも値はざるやと。亦一者喜て云く、如何なる幸あつて、後五百歳に生れ、此眞文を拜見するこそ、在世も無益也、前四味の人は未だ法華經を聞かず、正像又由なし、南三北七並に華嚴眞言の學者は法華經を信せず。天台大師云く、後の五百歳、遠く妙道に沾はむと、廣宣流布の時を指す歟。傳敎大師云く、正像稍や過き去て末法太だ近きに有りと。末法の始を願樂するの言也。時代を以て果報を論すれば、龍樹天親に超過し天台傳敎に勝る也。問て云く、後五百歳は汝一人に限らじ何ぞ殊に之を喜悅する乎。答て曰く、法華經第四に云く如來現在猶多怨嫉況滅度後と。天台大師云く、何に況や未來は化し難きに在るをやと(中略)天台大師云く、代を語れば則ち像の終り末の始め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬ

れば則ち五濁之生闘諍の時也と、（中略）疑て云く、何を以て之を知る、汝を末法の初め法華經の行者なりと爲すことを。（中略）答て曰く、時を論すれば末法の初め一定也、然れば則ち日蓮無くむば佛語虚妄とならむ。難して曰く、汝は大慢の法師にして、大天に過ぎ、四禪比丘に超へたり、如何。答て曰く、汝、日蓮を蔑如するの重罪、又た提婆達多に過ぎ、無垢論師にも超へたり。我が言は大慢に似たりと云へども、佛記を扶け如來の實語を顯はさんが爲め也。然りと云へども、日本國中に、日蓮を除去して、誰人をか取出し法華經の行者とせむ。汝、日蓮を謗らむと爲して佛記を虚妄にす、大惡人に非ざる乎。疑て曰く、如來の未來記、汝に相當するとして、但し五天竺並に漢土等にも、法華經の行者之れ有る歟、如何。答て曰く、四天下之中に全く二日無し、四海の内豈に兩主あらむや。

と放言し、炳かに日蓮自身に在て、正に佛敕を握て天降せしものなることを吹



聽せすむば已まざりしが如き、キリストが自から神の兒たるを宣告したると均しく先づ凡失をして耳を傾むけしむるの方便としては、血統を裝飾し系圖を美にし、若くは自から釋尊の再現なることを吹聽するの要ありしなる可し。また深く論議するの要を見ざる也。

斯くて此龍兒が千光山清澄寺に來りしは、天福元年五月十二日、實に彼が十二歳の時なりと云ふ。藥王丸と號し道台坊を師として日夕修行誦經に勉む。後蓮長と改名し、其全く髮を落して日蓮と改めしは、延應元年十月八日己刻にして、彼か十八歳の時なりき。安房國清澄山住人蓮長撰と題して『戒體即身成佛義』の著あり。想ふに是れ、彼の英雄僧が後年一大魔筆を揮て、總ての權門權教に對ひ壓迫的挑戰を爲すに到りし其初陣の處女作歟。記する所は、

分て四門と爲し、一には小乘戒體、二には權大乘戒體、三には法華開會の戒體、四には眞言宗戒體

に過ぎずと云へども、文中自から或るものを含有するの樂、禁し得ざるが如し。是れ頓ては、立正安國論となり、開目抄となり、報恩抄となり、遂には如說修行抄の一大痛罵となるの試驗紙たりしなる可し。

此の處女作を始めとして、所謂遊長時代の作なりと傳へらるゝもの尠なからず、と云へども、其多くは後の世の僞筆にして、眞に日蓮が作なりと思はしむるに足るものに到ては、皆無なりと謂ふ可し。

遊長を改めて日蓮と號し、數万千卷の法文を繙き盡し反古堆裡よりして新しき眞理を發見し死せる佛敎の前途に對て一大新天地を開拓す可く、旅裝を整ゝし、此時代なりき。先づ鎌倉に淨土宗を學び、淨土の到底意を充すに足らざるを看破し、更に去て北嶺圓城寺即ち三井寺の學舍に學ぶこと幾年、然かも遂に懷疑をして釋然たらしむる能はず、饑えたる日蓮の思想は益す饑え盡して、何物かを得ずむは止まざらむとせり。凡そ饑えたるものに對ては一片のパンの猶ほ



能く癒す可きものに非らざる也。日蓮が眼に映したる八宗の敎理は、悉く饑者の前に與えられたる一片のパンに過ぎざりき。日蓮豈に之を以て饑を癒するを得むや。彼は總ての敎門に觸接して、益〻其饑の癒す可からざるを覺うると共に、更らに八宗の敎門に對するの懷疑は彌々懷疑を重ね疑義は愈々疑義を孳り來て、他に何等かを得むとするの一種向上的の精神は、直に釋尊の實躰それに對て深き研究を濺がざるを得ずなりたる如し。

需めよ、左らば必らず得なむとは千古の眞理也。需むること斯くの如く強大にして且つ熱心なる日蓮、如何か得ずして止みなむや。十四年間の苦行研學と需めて已まざりし向上的精神とは、慥かに三十二歲の曉に在て、一大新光明を佛敎の反古堆裡に發見し、建長五年三月二十八日の東明、怒濤走り來ること三萬里の冲に沸ひ出されたる朝暾は彼をして南無妙法蓮華經の七字を唱出せしめずむは已まざりし也。此時や日蓮既に在來の日蓮にあらず、彼は天台大師の所謂末法の

始め地を尋ぬれば唐の東、竺の西、人を原ぬれば即ち五濁之生闘淨の時也てふ頂言により、佛敕を手にして天降せる釋迦牟尼の再生なりき也。一大新天地は茲に開拓され一大新眞理は茲に發見され、而して陳腐なる萬卷の經文は悉く一滴の活水を灑がれて皆な蘇生せむとす。斯くの如き堅信の下、此くの如き大發見をなす、穢多の兒日蓮を除く外、當時十方世界何人も非らざりき。

續て、三月二十八日は教界の歴史に在て沒却し得べからざる一大紀念日となりたり。所謂日蓮主義の旗色なる念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の四大格言は、日蓮の口を籍て惡魔の私語の如く此日清澄寺内の法壇より響き渡りぬ。嗚呼是れ沈靜せる桑門に對て惡魔が降せる一大痛棒也、一大打擊也。而して日蓮が日蓮主義發揮の序幕として、各宗に放つたる宣戰の布告なりと爲す。

各宗僧侶たらずとも、誰か此痛罵に接して戰慄せざるものあらむや。惡遺傳的穢多の血液を持せざる限り、斯かる大膽にして且つ魔王的の痛罵を他人の頭上



に降下さる可くもあらず。果然、寺内は鼎の沸騰するが如きに湧きかへりたり、日蓮を罵るの聲は法壇の下より湧き來て、十數年間苦行研學の一大產物たる日蓮主義の四大格言は、遂に狂人の妄語を以て目さるゝの果敢なき運命に逢着したりぬ。追放されて西條花房の郡に到り、地頭の爲め刺殺されむとす。更に去て密かに鎌倉に遁れ、名越の松葉ヶ谷に移り、日夕名越の道に出てゝは妙法の首題を唱ふ。

日蓮か眼底に映したる四大格言は、邪法怨滅の一大呪文也、惡時代反抗の一大聲言也。然かもそは穢多の兒日蓮を除くの外は、十方世界敢て一人の敬聽者あらざりしを奈何せむや。他眼に映したる四大格言は、他宗を呪殺し、佛敕を呪殺し、更に進むでは釋尊を呪殺するものなりとして、彼は何ものよりも劈頭に清澄寺僧侶の猛烈なる彈劾に逢遇するの厄を免かる能はざりき。蓋し此聲言たるや、日蓮が十方世界に對て發したる宣戰布告の第一着にして、而して他宗の

迫害を受くるの餘儀なき逆境に踏み入りし第一歩也。

美なる聲言が屢々凡俗の爲めに誤られ、屢々世の迫害する所となり、若くは怒濤渦中に投せられて、幾多の苦き試驗に逢着するは、吾人の屢々認むる所也。

斯くて以て金聲玉語は益々耀きを放ち、世をして幾多の拜禮を拂はしむるに到るものなるが如し、日蓮が四大格言に到ても亦た然り。然れども、其迫害の度と數に到ては、古來日蓮よりもより多く辛き歴史を有するものは非らざる可し。

彼の羅馬法皇の根本教義を非認して起ちたるルーテルの迫害と云へども、之を日蓮が夫に比せば、殆むど云ふに價ひせざる也。

日蓮曾て自から記して云く、

我等が本尊釋迦如來は在世八年の間折伏し給ひ、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年、今、日蓮も二十餘年間、權理を破す、其間の大難數を知らず、佛の九横の難も及び及はず、恐らくは天台傳教も法華經の故に、



日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只だ惡口怨嫉ばかり也云云

と、其迫難、以て徴す可からずや。

清澄寺時代に於ける日蓮は、彼が天典の天使を天下に向て發露す可く、深き素養を爲せしの時代なりき。而して腐敗佛教の前途に一大活水を濺く可く、彼が最初の光明を認めたるの時代なりき。彼は之を認識すると共に、三十年の煩悶、忽ち消え去つて、一道の白光の塵界を照すの思ひをなし、之を世に示し人に教ゐ、佛教の本源釋尊の實躰を語る可く、法壇に向て進みき也。然かも不幸にして、善師を遠離し惡師には親近するの濁世、人は日蓮が爲め一個の法壇だも與ふるの仁惠なかりしを奈何せむ。十數年間苦行研學の結果として得來つたる反古堆裡の一大新眞理は、狂人の狂語として忌彈せられ彈劾せられ、世をして日蓮が名を聞くこと惡魔の如くに思爲せしむるに到たるを奈何。日蓮が憤慨、夫れ幾許ぞや。

佛敎僧侶にして既に、佛敎の新眞理に耳を傾くるを欲せず、却て八万四千の法門を呪殺するものとして、世に彈劾せむとす。敎門以外の無識無智の輩、如何ぞ日蓮主義を窺ひ得むや。然れども彼は、毀らん人には益す申し聽かせつゝ、自己が發見になれる新光明を示さずんば已まざりき。去て鎌倉名越の松葉ヶ谷に到り、日夕漁夫に對て說法し、而して密かに鎌倉幕府に新宗敎認定の儀を通らせとせり。嗚呼、果して是れ容易に爲し得可きの事態なる乎。



# 第三編　伊東流罪前後に於ける

## 英雄僧日蓮

### 上

世に僧侶の不靈より度す可からざるものは、尠かる可し。彼等は聽き得るの耳を持しながら、新しき眞理を聽くを欲せざる也、彼等は視得るの眼を有しながら、新しき光明を視るを欲せざる也。昔し羅馬の腐敗し、今日東願寺の振はざる所以、また深き原因の一を玆に存ぜざるは無し。蓋新宗敎新眞理の發見は舊敎舊眞理の迫害に價す、之を以て出來得るだけ自己の花園を保守するの上に於て、新敎新眞理を呪殺するの法を講ぜざる可からず。斯くの如くにして日蓮も亦た、淸澄寺の法壇より彈劾せられ追放せらるゝの餘儀なき場合を有したりき、是れ或は日蓮に在て、最も大なる激憤を與ふるの刺劇劑なりしやも計る可

からず、何となれば、彼は、一宗一派を說伏するの夫よりも、天下に對て說法を擅にするの動機を此間に作成したれば也。

既に僧侶語るに足らず、曾に語るに足らざるのみならず動もすれば僧侶は新眞理を呪ふの惡魔たらむとす。日蓮乃ち轉じて他に對て、新眞理の光明を示さゞる可からず。他とは何ぞ、曰く天下に對て也。

天下に對て說法せむと欲せば、勞ひ先づ天下をして日蓮を信賴せしむるの要起る可し。而して後に徐ろに敎理を說くに非らずむば、何人も耳を傾け眼を集注するに由無く、百万言の說法、恐らくば世に何の感激だも與ふる能はざるに終らむ歟。

秋は正に飢世也、白法隱沒して七難三災旺に起れり。舊記は傳へて曰く、

正喜元年丁己八月二十三日戊の刻、大地震、

同じく大旱、



同二年八月朔日大風雨、

同じく二日より大洪水、

正喜三年まで飢饉疫病續出す、

文應元年、飢饉大洪水大風雨止むこと無し、

同八月に到て愈々其極に達し牛馬の倒るゝもの數を知らず、

天變地妖並出す、豈に人事の異變無からむや。之れ日蓮に取ては、世に乘ずる最好の機械なりしが如し。日蓮は此天變地異を巧みに利用して、日本國の前途に一大占を行ひ、斯くの如き天變地異の續出は則ち惡敎亡びて新敎興るの兆なりと爲し、今にして新敎を樹立し世を治め人を治めずむば、外寇の到る遠きに非らざる可きを預言したりぬ。立正安國論の一編は、之を極端までに痛議したる、の一大論文にして、宿谷左衛門入道を經て最明寺入道相模守時頼が許に奉呈したるもの、實に日蓮遺文集中最も人口に上れる名著作なりと爲す。

立正安國論は、文應元年七月十六日松葉ヶ谷の草庵裡に於て脱稿したるもの也。始め七難三災の國土に並出するや、彼は立正安國論を草す可く、先づ守護國家論の稿を起しぬ。蓋し守護國家論は、立正安國論の依て出づる草稿にして、安國論は國家論の幾多改削を施されしものに過ぎざるが如し。安國論の爲め、國家論は日蓮が腹稿なりしならむ。其立論、其文章、長短の別こそあれ、眼目を同うするの點に於て、主張を同うするの點に於て、日本國の前途に一大預言を發せるの點に於て、毛頭異つたるものを發見せざる也。守護國家論並に安國論の主張する所は、天變地妖を目して日本國大動亂の前兆なりとなし、外寇來襲の先驅なりと預言し、之を未前に防止せむと欲せば、邪師を遠け邪教を怨滅し、新師と新教とを以て國民を治むるにあるものなりと斷論せるもの也。其議論雄大、威權自から備つて恰かも敵黨彈劾の呪文に接するの槪あり。

旅客來て嘆て曰く、近年より近日に到る迄、天變地夭飢饉疫癘遍く天下に



滿ち地上に迸る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招ぐの輩、既に大半に超えたり。之を悲しまざる簇敢て一人も無し。然間、或は利劍即是の文を專にし、西土教敎主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃ち、東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰て、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて百坐百講の儀を調へ、有は秘密眞言の敎に因て五瓶の水を灑ぎ、有は坐禪入定の儀を全して空觀の月を澄し、若は七鬼神の號を書して而して千門に押し、若は五大力の形を圖して萬戸に懸け、若は天神地祇を拜して而して四角四堺の祭祀を企て、若は萬民百姓を哀むて而して國王國宰の德政を行ふ。然りと云へども唯だ肝膽を摧くのみにして彌々飢疾に逼り乞客目に溢れ死人眼に滿てり。屍を臥せて觀を爲し戸を並て橋と作す。夫れ觀れば二離璧を合し、五緯珠を連ね、三寶世に在し、百王未だ窮らず。此世早く衰へ其法何ぞ廢れたる。是れ何なる禍に依

り何なる訳に出るや矣。

主人曰く、獨り此事を愁て胸臆に憤悱す、客來て共に嘆く、屢々談話を致さん。夫れ出家して而して道に入る者は法に依て而して佛を期す也。而るに今神術も驗はす佛威も驗無し。具に當世の體を現て悉に後生の疑を發す。然らば則ち圖籙に仰て而して恨を呑み、方載に俯して而して慮を深くす。倩々微管を傾け聊か經文を披きみるに、一世皆な正に背き人悉く惡に瞞す、故に善神は國を捨て而して相去り、聖人所を辭して而して還らず。是を以て魔來り鬼來り災起り難起る。言はざる可からず、恐れざる可からず、

（安國論第一節）

是れ安國論開巻第一ページの記する所の文字也。彼は筆を三災七難に起して、其三災七難の因て進出する所以を炳かにし、而して更らに進むで、一大異變の大日本國を襲はむとするものあるを道破せずむば已まざりき。



法華經ありと云へども未だ嘗て流布せず、捨離の心を生して聽聞せむことを樂まず（中略）。世尊我等四王並に諸の眷屬及藥叉等斯くの如き事を見て其國土を捨てゝ擁護の心無らん。但し我等のみ此王を捨棄するに非らず、亦た無電の國土を守護する諸天善神有らむも、皆な悉く捨去せむ。既に捨離し已ぬれば、其國に種々の災禍有て國位を喪失す可し。一切の人衆皆な善心無く、唯た繫縛殺害瞋諍のみ有て、互に相讒諂し枉て辜無きに及ばん。疫病流行し、彗星數々出て、兩日並ひ現し、薄蝕恒無く、黑白二虹不祥の相を表はし、星流れ、地動き、井內に聲を發さん、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭て苗實成らす、多く他方の怨賊有て國內を侵掠せむ。人民諸ろの苦惱を受けて土地可樂の處有ること無けむ。（安國論第二節）

世上、唯だ夫れ繫縛殺害瞋諍のみあつて、互に相讒諂これ事とするの秋は、天神地祇の國土を捨離したるの時也、而して星流れ地動き　天虹天に現はれ惡風

地に蹈るの時也。是れ頓て他方の怨賊國土を覬ふの時ならざらむや。新眞理は發見せられたるも、世は穢多の兒日蓮が言に耳を藉すを欲せず、却て其流布を碍せむと勉めつるに非らずや。

結果外にのる日蓮は次のページに於て、之を大集經に徵し、益す白法隱沒したならざるを痛議しぬ。大集經に曰く、

佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆な長く諸法亦た忘失せん。當の時に虛空の中に大なる聲ありて、地を震はし一切皆な徧動せん事、猶ほ水上の輪の如し。城壁破れ落ち屋宇悉く圮れ(中略)諸有の井泉池一切盡く枯涸し(中略)諸山皆燃として天龍雨を降さず、苗稼皆枯死し生する者皆な死れ盡き(中略)昏闇として日月も明を現さず(中略)十不惡の業道貪瞋癡倍增して衆生父母に於て之を見ること獐鹿の如くならむ(中略)諸天善神王の衆生を悲愍せむもの、此濁惡の國を棄て、皆悉く餘方に向はむ。



仁王經中にも曰く、

國土亂れん時は、先つ鬼神亂る、鬼神亂るゝが故に萬民亂れ、賊來て國を劫かん。百姓亡喪し臣君太子王子百官共に是非を生せん。天地恠異し、二十八宿星道日月時を失ひ度を失ひ賊の起ることあらむ。

と。而して其因を尋ね原を研むれば、一として白法の隱沒に依らざるは無しとせず、地震ひ井涸れ星流るゝ鎌倉時代の日本國、亦た是れ白法隱沒して、惡鬼國土に咀呪を逞うする故ならずとせむや。日蓮は大集仁王諸經の示すが如くに、また新眞理の流布せざるが故に歸因すと爲したりき。則ち、如何なる善師の出現し來て、大布施を行ふとも、實敎白法を擁護せざる限り、七難三災を除去し得らるゝものにあらずと爲したり。除去し得られざるもの豈に曾に飢饉疫癘の夫れのみならむや。頓て來る可き他方の怨賊を奈何にせむとは、日蓮が此安國論を草するの一大眼目たりし也。

而して日蓮は、他國侵逼の難の刻下に迫り來つたるを預言しつゝあり。何を以て彼は火膽にも此預言を世に發表したるや。

藥師經に曰く

若し刹帝利灌頂王等の災難起らむ時、所謂人衆疫病の難、非時風雨の難、過時不雨の難、他國侵逼の難、自界叛逆の難、星宿變怪の難、日月薄蝕の難あらむ。

仁王經に曰く

國土の中に七の畏る可き難有り。日月度を失ひ時節叛逆し或は赤日出て黑日出て二三四五の日出て或は日蝕して光無く或は日輪一重二三四五重輪に現するを一の難と云ふ也。

二十八宿度を失ひ、金星彗星輪星鬼星火星水星風星刀星南斗北斗五鎮の大星一切の國主星三公星百官星、此の如きの諸星各々變現するを二の難と爲す也。



大火國を燒き、萬姓燒盡し、或は鬼火龍火天火山火神火人火樹木火賊火あらむ。斯の如く變怪するを三の難と爲す也。

大水百姓を漂沒し、時節反逆し冬雨り夏雪り冬の時に雷電霹靂し六月に氷霜雹を雨し、赤水黑水青水を雨し、土山石山を雨し、沙礫石を雨し、江河逆に流れ、山を浮べ石を流す。是の如く變せむ時を四の難と爲す也。

大風萬姓を吹殺し、國土山川樹木一時滅沒し、非時に大風黑風赤風青風天風地風火風水風。是の如く變するを五の難と爲す也。

天地國土亢喝炎火洞然として百草亢旱し五穀登らずして土地赫燃として萬姓滅盡せむ。是の如く變するを六の難と爲す也。

四方の賊來て國を侵し內外の賊起らむ。火賊水賊風賊鬼賊ありて百姓荒亂し刀兵勃起す可し。斯くの如く怪するの時を七の難と爲す也。

大集經に曰く

若し國王有て無量世に於て施戒懸を修すとも、我法滅せむを見て、擁護せずば、是の如く種うる所の無量の草根悉く皆な滅失して其國當に三の不祥の事あるべし。一者穀潰、二者兵革、三者疫病。

則ち此等の經文を通して見たる所を信し得可くむは、國難襲來の預言は此際に當て容易に爲すを得可かりしならむ。日蓮が預言せざる前に於て、各種の經文既に此預言を發したりき。日蓮は之を安國論中に於て新らしく繰りかへせしに過ぎざりしもの也。

日蓮は安國論の終りに於て、愈々外冦襲來の斷言を爲して曰く、

藥師經七難の內、五難忽ち起て二難猶ほ殘れり、他國侵逼の難、自界叛逆の難也、大集經三災の內、二災早く顯はれ一災未た起らず、所以兵革の災也。金光明經の內種々の災禍一々起ると云へども、他方の怨賊國を侵掠す



る、此災未た露はれず未た來らず、仁王經七難の內六難今盛にして一難未だ現はれず、所以四方の賊來て國を侵す難也。加之、國土亂れむ時は先づ鬼神亂る、鬼神亂る故に萬民亂ると。今此文に就て具に事の情を案するに百鬼早く亂れ萬民多く亡びぬ。先難是れ明かなり、後災何ぞ疑はむ。若し殘る所の難、惡法の科に依て並び起り競ひ來らば、其時何を爲さむ哉。帝王は國家を基として而して天下を治め、人臣は田園を領して而して世上を保つ。而るに他方の賊來て其國を侵逼し、自界叛逆して而して其地を掠領せば、豈に驚かざらむや。

疫病の難、大旱の難、風雨の難、星流れ、惡鬼踊つて、百難到らざるは莫し。殘す所は他方の賊侵掠の難と自界叛逆の難の二あるのみ。而して此二難亦た遠きにあらざる也。邪法を刼け邪師を退け、白法善師を親近して、國家を治むるに非らずむば、殘す二難を奈何せむとは、日蓮が安國論一編の草さるゝ一大眼

目に非らずして何ぞ。之れ日蓮が三災七難を利用して、自己が發見に係はる一大新眞理を世に示さむと試みたる最初の手段なりき。日蓮は其新眞理を世に信頼せしむる上に於て、先づ、世をして日蓮そのものを信頼せしむるの要を覺にたりし也。想ふに立正安國論の一編は、此意味を離れて他に幾許の意味も有せざるなる可し。

災難對治抄の著に在ても、亦た日蓮は同一立論の下に、國中に充滿せる破國破佛の惡比丘を熱罵し、斯かる邪法を除去するに非らずむば、既起の災難除く能はず更らに大なる苦難到來す可しとて、滔々數千万言、日蓮一流の諍鬪的魔筆を揮て、災難對治の策をたてたりき。

然かも不幸にして、幾千万言の美言も、世をして敬聽せしめ得ざりしを奈何にせむ、彼は却て此美言の爲に迫害を買ふの不幸なる場合に陷りぬ。日蓮が預期は全く違反して、彼は國法を呪詛し國家を阻殺するものなるかの如くに、冷罵



せられぬ。他宗の僧侶は、彼の肉を屠らずむば已まざらむとし、衣は裂かれ、四肢は血に塗れて、弘長元年五月十二日、彼は伊豆國伊東の浦に流罪せらるゝに到れり。日蓮が感慨、夫れ幾許ぞや。

一代大意の著は正嘉二年二月伊豆流罪前、鎌倉松葉ヶ谷に於て脱稿せしもの、懇々として教理を解説せり。此外、松葉ヶ谷に於ける著書之れ無きには非らざるも、多くは『餘外』中のものなるが如し。唱法華經題目抄の長論文も亦た、安國論の脱稿前數十日になれるもの也。七字の題目を說き、更に四大格言に就て論を構えたり。當時四大格言に接したるの國民は、恰かも惡魔が日蓮の口を借て此魔言を放ちしものならむを信じたりしなる可し。日蓮に在て之を辯ずるの要は充分に在りたりし也。此前後に於ける彼の著作が、多く此點に對て筆を走らせたるを見れば、如何に四大格言の彼の爲に各宗僧侶が怨を買ふの基因となりたりしやは分明なる可し。

五月十二日、彼は鎌倉を舟出して、波の間に〳〵、伊豆は伊東の浦に向ひぬ。あはれ佛敕を手にして現はれたる日蓮は、氣運未だ熟せず、新眞理の光明を萬衆に對して發露するの花園に到し得ず、徒らに惡運命の齟齬する所となつて金蛇踴る波路を遥かに鄕土を離るゝに至りぬ。

翌年正月十五日、四恩抄成る、これ俗に伊豆御勘氣抄と號するもの也。日蓮、同著中に記して曰く、

法華經に云く、如來現在猶多怨疾況滅度後云云と。此文を見候ひし時は、さしもやと思ひ候しに、今こそ佛の御言は違はざりけるもの哉と、殊に身に當て思ひ知れて候へ。日蓮は身に戒行なく、心に三毒を離れざれども、此御經を若や我も信を取り人にも緣を結ばしむる歟と思て、隨分世間の事おだやかならむと思ひき。世末に成り候へば、妻子を帶して候ふ比丘も、人の歸依を受け、魚鳥を服する僧もさてこそ候が、日蓮はさせる妻子をも帶



せず魚鳥をも服せず、只だ法華經を弘めむとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち、螻蟻をも殺さゞれども惡名一天に彌れり、恐くは在世に釋尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり、是れ偏に法華經を信ずる事の餘人よりも少く經文の如く信をもむけたる故に、惡鬼其身に入てそねみをなすかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の二千餘年已前に說れて候法華經の文にのせられて、留難に値へしと佛に記し置れ參せて候事のうれしさ、申し盡し難く候。此身に學文仕りし事漸く二十四五年に罷りなる也、法華經を殊に信じ參せ候ひし事は、譏かに此六七年より以降也。又信じて候ひしかども、懈怠の身たる上或は學文と云ひ或は世間の事にさまられて、一日に僅かに一卷一品題目計り也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで、二百六十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存候。其故は、法華經の故に斯かる身と成て候へば、行住坐臥に

法華經を讀み行するにてこそ候へ。人間に生を受て是程の悦は何事か候ふ可き（中略）

無量劫の間、六道四生を輪廻し候ひけるには、或は謀叛を起し強盜夜打等の罪にてこそ國主より禁を蒙り流罪死罪にも行はれ候らめ。是は法華經を弘せむ歟と思ふ心の強盛なりしに依て惡業の衆生に讒言せられて斯かる身に成て候へば、定て後生の勤めには成ならむと覺候。是程の心ならば豈夜十二時の法華經の持經者は末代には有がたくこそ候はめ（中略）

法華經に云く、是法華經於無量國中乃至名字不可得聞何況得見受持讀誦云云と。されば此讒言の人國主こそ、我身には恩深き人には御坐し候らめ。佛法を習ふには必らず四恩を報す可きに候歟。四恩とは心地に云ふ、一には一切衆生の恩、一切無くば衆生無邊誓願度の願を發し難し、又惡人無して菩薩に留難をなさずば、爭か功德を增長せしめ候べき。二には父母の恩



六道に生を受くる必らず父母あり。其中に或は殺盜惡律儀謗法の家に生れぬれば、我と其科を犯さゞれども、其業を成熟す。然るに今生の父母は我を生て法華經を信ずる身と成せり。梵天帝釋四大天王轉輪聖王の家に生て三界四天をゆづられて人天四衆に恭敬せられむよりも、恩重きは今の某が父母歟。三には、國王の恩。天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に神を養ふこと、皆な是れ國王の恩也。其上今度法華經を信じ、今度生死を離るべき國王に値ひ奉れば、爭か少分の怨に依て怠かに思ひ奉るべき哉。四には三寶の恩。釋迦如來無量劫の間菩薩の行を立給ひし時、一切の福德を集て六十四分と成して、功德を身に得給へり。其一分をば我身に用ひ給ふ。今六十三分をば此世界に留置きて五濁雜亂の時非法盛ならむ時、謗法の者國に充滿せむ時、無量の守護の善神も末味をなめずして威光勢力減ぜむ時、日月光を失ひ天龍雨を降さず、地神地味を減ぜむ時、草木の根莖枝葉華實等

の七味も失せん時、十善の國王も貪瞋癡を增し父母六親に孝せずしたしからざらむ時、我弟子無智無戒にして髮ばかりを剃て守護神にも捨てられて活命のはかりことなからむ比丘比丘尼のさゝへとせんと誓い給へり。(中略)然るに末代の凡夫三寶の恩を蒙て三寶の恩を報ぜず、如何にしてか佛道をなさむ。某は愚癡の凡夫血肉の身也、三惑一分も斷ぜず、只だ法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加へられ流罪せられたるを以て、大聖の臀を燒き髓をくだき頭の釘ねられたるに擬らへむと思ふ、是れ一の悅び也。

第二に歎きと申すは、法華經第四に云く、若有惡人以不善心於一劫中現於佛前常毀罵佛其罪尙輕若人以一惡言毀呰在家出家讀誦法華經者其罪甚重云云と、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼より淚を流す事雨の如し。我一人此國に生れて多の人をして一生の業を造らしむる事を歎く。彼不輕菩薩を打擲せし人等身に改悔の心を起せしだにも猶罪消え難う



して、千劫阿鼻地獄に墮ちぬ。今我に怨を結べる輩は未だ一分悔る心も起さず。是體の人の受る業報を大集經に說て云く、若人ありて、萬億の佛の所にして其身より血を出ん意に於て如何此人の罪をうる事寧ろ多しとせむや否や大梵王言く若人只一佛の身より血を出さん無間の罪尙多し、無量にして算をおきても數をしらず、阿鼻大地獄の中に墮ちん。何況や萬億の佛身より血を出さんものを見むをや。終によく廣く彼人の罪業果報を說事ある事なからむ。但し如來をば除き奉る。佛の曰く、大梵王若し我が爲めに髮を剃り袈裟をかけ、片時も禁戒を受けず、缺犯を受けむものを惱まし罵り杖をもつて打ちなむとする事有らば、罪を得る彼よりも多し。

弘長二年壬戌正月十五日

工藤左近尉殿

日蓮印

爾り、妻子を帶し魚鳥を服するの僧は國土に充滿し、詐欺姦淫貪慾非業の輩は天下に横行して敢て憚からざるに係らず、佛敕の骨髓たり釋迦の實躰たる法華經を修行し鼓吹するの行者には、冠するに罪名を以てし、强盜夜盜の罪科と同一視して、以て遠國に流罪すること、甚だしき誤謬の一には非らざる乎。猶多怨疾、三類の怨敵打定まれるを、釋迦の豫言に依て經文の上に見たりし日蓮に取ては、之れ今更らながらの意外に打擊さるゝを禁し能はざりしなる可し。法華經の行者と夜盜强盜の類と、均しく同一ベージに記されむとは日蓮ならずとも誰れか豫期せむや。白法隱沒して國土に惡鬼亂れ、邪法邪師は親近されて、善法善師は遠離さるとは、眞に是れ日蓮が當時の眞相を痛罵して餘さゞりしの語なりと爲す。

然れど斯くの如きは偶々以て日蓮が一世に卓絶し超越したりしを證するに足らむ歟。豫言者鄉里に容れられずとは、吾人が舊くより聞けるの言也、吾人を



以て視るに、豫言者は恐らく一代に容れられまじ、況むや萬代精華の一大偉人に於てをや。キリストが平和の福音者たるの身を以てだも、猶ほ且つ當時の人は十字架に血を塗らしめずむば已まざりしに非らずや。マホメットト能く幾許か當世に容れられたる。ルーテル能く幾許か當世に容れられたる。見來れば世の偉人を解し得ざる、甚だしい哉。況むや、十數年間苦行研學の賜として、念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の四大聲言を放ち、此くて幾多の因緣を有する淸澄寺の法壇に於てだも、尙其猛烈强硬なる諍鬪主義の爲め彈劾せられ逐放せらるゝの運命を持する日蓮に於てをや。當時の時代は惡時代反抗精神のインカーネーションたる日蓮を容れむには、餘りに惡國惡王惡臣惡民の多きに過ぎたりしに似たり。

日蓮は、寧ろ其容れられざるを以て、滿足なしたりしが如し。願れば、我れ恰かも在世の釋尊を諸ろの外道が毀り奉りしにも似たりとは、彼が如上の文中に

鏤刻せる所にあらずや。法華經を信することの餘りに深く、法華經を行することの餘りに厚かりし爲めに、却て科を得るは、亦た恰かも善を爲すことの餘りに多かりし爲め天罰に遭遇したりと云ふに異らず。斯の如きは決して天地に有る可からざるの數理也。而して之れ有るは、有らしむるものゝ罪業に非らずして何ぞ。日蓮は寧ろ、法華經の所謂猶多怨疾云々を以て、我身に徴し、愈〻自己が法華經と合躰せるを自信し、愈〻自己の貴む可きを確信したりぬ。法華經の故に流罪の罪業を得、日蓮に在て是れ遺恨なかる可き歟。哀れむ可きは罪するものゝ罪業也、如何に大布施を行ふとも白法を擁護せざるものは阿鼻大地獄に落つへければなり。懷ふ可きは讒言の國主かな、是れ法華經の行者を以て任する日蓮に於ては、寧ろ日蓮をして大を爲さしむるの一大恩人なる無からむや。更に最も懷ふ可きは、日蓮が血液を頒たれし父母なる哉、惡時代反抗の天使として、諍鬪主義の一大インカーネーションとして、惡國惡王惡臣惡民の充滿せる日本國に、一大反抗を試み、一大諍鬪を敢行す可き運命を有するの日蓮をして、梵天帝釋四大天王轉輪聖王の金家玉樓に人とならしめず、邦土中最も冷遇され酷遇されつる穢多の血統に連らならしめしこそ、却て是れ惡魔主義の一大偉人たらしめし上に就て、最も多くの惠みを垂れたる所以のものには非らざる歟。日蓮、豈に一流罪の科を之れ恨みなむや。



一不輕菩薩に亂打を加へしものは、後其罪を悔ゐたりと云へども、猶ほ且つ千劫阿鼻地獄に墮落しぬ。今日蓮に怨恨を結べるものを見るに、啻に自個の失罪を悔ゐざるのみならず、益〻佛敕を蒙れる天使に對て呪言を放ち、彼の歴史をして血赤色たらしめずむば止まざらむとし、其肉を屠らずむば飽くを知らざらむとす。彼等が當に受く可きの罪科、計られざるに非らずや。日蓮が愁憂せしは却て是れなりき。三類の怨敵打ち定まれるを覺悟なしたる彼に在ては、一流罪の如くは、餘りに痛心の事に屬せざりし也。否な寧ろ、彼は之に依て以て、

幾多の感激と信念を堅固にし、而して更らに猛烈なる意氣と威權とを持して、惡國惡王惡臣惡民の總てに、大々的反抗を試む可く、大結束するを禁ずる能はざるの動機を得たりしもの、如く然り。

昔者、詩人バイロン『マリーク、ファリエロ』中に記して曰く、我れ惡時に生れ我が血統は我をして無禮を得せしむる知事となせり我エネチア國及其國民の爲めに或は兵士となり或は忠僕となりて働きたり我或は戰ひ或は血を流し或は兵士を命令し又た勝利せり苟も我國に利益するものあらんには或は陸し或は海することを厭はずして孜々として我が義務を盡すこと茲に六十年而して一として躬からの爲めにせしものあらざるなり汝等往て彼の血を流せる墻壁に問へ汝何故に其胸を裂くやと鳥若し言語するあらむには只だ其の雛の爲めなりと答ふ可し。と、嗚呼ファーエロは斯くの如くにしてエネチヤ國の爲に戰ひたり、然かも遂にエチチア國民の爲めに其の忠僕なることを認識されたりしや。雛を育



せむ爲めに胸を裂きて血を流せる墻壁は、エチチア國民より何等の報酬をか受けたる、バイロンは遂に社會の何等の善意をも有せざるに、憤激せざるを得ずなりぬ。曰く、一切の事物は習慣の最も誤謬なる權衡に由りて計られ、輿論なるものは全能の力を有せり、而して輿論なるものは暗黑を以て地球を蔽ひ善惡の判斷を偶然ならしむ。又た、自己の判斷の餘りに明瞭に輝き、自由なる思想は罪とせられ、地球には餘り多く光明なからむ爲め、人々戰々競々たり、と。

佛敕を手にして天降せる時代反抗の天使を咒ふの輿論は、眞に是れ暗黑を以て地球の總てを掩はむとするものに非らずして何ぞ。自由思想は割せられ、新眞理は凡俗の爲めに說示するを防止さる。地球には餘り多く光明なからむ爲め人々戰々競々たるは獨りバイロン時代に非らざる也。エネチア國民の忠僕と爲つて、胸を裂れしもの、何ぞ獨りファエロにのみにして已みなむや。十數年間の苦行研究は偶々以て淸澄寺法壇上の追放を買ひ、四大聲言と立正安國論の一大預

言とは、遂に流罪の大科を買ひしもの、日蓮は實に日本國民の父たらむとして却て其胸を裂きしもの也。從て日蓮が惡時代に反抗せむづる力は、事毎に激し來て、一層强大を加ふると共に彼が歴史は、各ページ毎に血赤色に染まされ行きつゝあり。

越えて弘長三年五月二十二日、彼赦免せられて、僅かに本國に歸るの榮を得たりぬ。伊豆伊東の浦よりして懐しき本國に歸るを得たりし日蓮は、途上舟中、抑も何事をか考案しつる。惡遺傳の悲慘たる血液によつて血脈の總てが皷動せる日蓮に在ては、想ふに彼は自己先天的の使命を果す可く、若くは、自己が佛敵によつて授りたる惡魔主義を以て自己の歴史を血赤色に染む可く、或る悲愴なる幕中に入り來らむとしつるには非らざる歟。

穢多の兒日蓮が惡血液は、彼を驅つて惡遺傳の下に斃れしめずむば止まざるもの也。伊豆は伊東の怒濤打ち寄するほとり、發ひ來つたる怒濤的靜鬪主義は、



一波は一波よりもより强烈に巨岩を破碎せずむは止まざらむとす。日蓮主義は益〻魔王主義に化し來て、日本國民の思想上に大なる波動を印するの餘儀なき秋は、刻々に近つき來りぬ。死火山の噴火、抑も如何なる聲をか發する。

## 下

恰かも死火山が再たび大鳴動を爲さむとするの勢を持して、日蓮は聖に本國の土を踏むことを得るの身とはなりぬ。靜鬪主義を以つて惡國土惡時潮の間に一道の新活路を開鑿す可く、佛敵を手にして出現したる日蓮は、噴火山的大鳴動を爲して、此等惡時潮に抗せざるべからざる也。而して其の大反抗を試むるや、日蓮は『日蓮を毀らむ人々には彌〻申し參らす可し命長へてお在さば御覽ある可し若し日蓮に怨を構へむ人は必らず先づ無間地獄に墮ちなむ』と號呼しつゝ、森嚴犯す可からざるの威權と何物も能く壓迫し得べからざるの意氣とを

持して、有うる權敎權門の輩を冷罵し痛罵し熱罵し盡さずむば止まざりき。伊東より歸來したる日蓮は、先づ安房小湊に歸鄉して老母を尋ねたり。俗の所謂東條被疵の難の起りたるは此際の事也。預言者鄉里に入れられず日蓮が標榜し抱持する一大魔王主義と一大諍鬪主義とは、深く鄉人の恨む所となり、小湊に歸りける時、彼は地頭東條左衛門景信が爲め數百人の兵器に圍まれ、黑衣は裂かれて、疵を負ひ、血は流れ、僅かに遁れて鎌倉に走りぬ。佛敕を手にして出現したる穢多の兒日蓮が身一つは、今や日本六十餘州裡入るゝに地なからむとせり。

當世念佛者無間地獄事の著は東條被難の二ヶ月前、東條に於て脫稿せしもの也。

問云く、當世の念佛無間地獄と云ふ事其故如何。

の一語を冒頭として、念佛無間禪天魔の四大格言の一節を詳說し去つたるもの也。四大格言は、日蓮が各宗各派に對つて發したる宣戰狀也、彼は念佛禪眞言



律等の各宗を罵つて權門權門の輩なりと爲し、邪師惡比丘が跳梁せるの魔窟なりと爲し、此等の邪法を怨滅せしめずむば、遂に日本帝國を如何にせんと呼號なしたるもの也。而して其念佛宗に對て最も猛烈なる打擊を與え、殆むと窒息せしめずば毫も假借せざるの槪ありしもの、想ふに當時に在て最も念佛宗の跋扈したりしが爲めならむ。

眞宗は新宗也、而して其標榜する所は平和の福音の傳道者なるにあり。日蓮は後の世に佛敕を蒙つて出現したり、其出現するや『像の終り末の始め唐の東鄕の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時、此時地涌千界出現して本門釋尊の脇士と爲り、一閻浮提第一の本尊此國に立つ可し』の預言によつて天國の鍵を握り來りし也。日蓮は更らに新しき新眞理を示す可きの先天的使命を有せり、新眞理とは何ぞ、法華經の經文と一致する限りに於て、飛影す可き惡魔主義の傳道也。新宗と新々宗、既に相容る可からざるの性質を有す、況むや平和の福音

者たる親鸞主義と職の傳道者を以て即ち法華經の行者なりと自信する日蓮主義とが、如何か相容れ相許す可けむや。日蓮は總ての權教權門を退治するに於て、先づ其劈頭に念佛を非認せざる可からざる也。之を以て彼は最も多くの痛罵を念佛宗の頭上に降しぬ。

夫れ以れは佛法流布の砌りには天下靜謐也、

神明仰崇の際には國土富饒也。

とは日蓮が『念佛者追放宣言旨狀』の卷頭に染めし文字也。天下靜謐にして國土豊饒何を以て戰爭主義の要あらむや。平和の時代には平和の福音を傳ふれば即ち足りなむ、万衆之に依て以て天國に赴くを得之を以て花園に遊ふを得れば也。地震ひ、黑雲降り、星は流れて血は湧くの濁世に在て、平和主義必竟何爲るものぞ。佛法末世の時代に在ては、唯た夫れ戰はざる可からず、惡國と戰ひ、惡王と戰ひ、惡臣と戰ひ、惡民と戰ひ、邪法邪師と戰はざる可からず。念佛者



流の如きに對ては、須く一個の追放宣言狀を與へて放逐しなば即ち足りなむ。神の敎の爲めに戰ひ、勝たは利を得、負れば死せむのみ、決して他人を煩はすの要なしと宣言したりしマホメット主義は、即ち佛法末世の唐の東竭の西に出現せる日蓮が標榜と毫末も異色あるを見ざる也。

此主義の產物として、日蓮は益々平和主義の福音を非認しぬ、平和主義の下に腐敗し行きつゝある念佛宗を非定しぬ。文永元年甲子九月二十二日安房國東條花房の鄕に於て脫稿したる當世念佛者無間地獄事の一編は、念佛者追放宣言旨狀と共に、眞宗の敎理上に一大鐵槌を降下なしたるものなりき。

日蓮、當時の日本宗敎界を說いて曰く、

或は聖道難行雜行は小善根隨他意有上功德等と名け、念佛等を以ては大善根隨自意無上功德等と名けて、念佛に對して、末代の凡夫此を捨てよ、此門を閉せよ、之を閉け之を抛てよ等の四の字を以て、之を制止す。而して

日本國中の無智の道俗を始め大風に草木の靡くが如く、皆な此義に隨て忽ちに法華眞言等に隨喜の意を止め建立の思を癈す。而る間人毎に平形の念珠を以て彌陀の名號を唱へ、或は毎日に三萬遍六萬遍十萬遍四十八萬遍百萬遍等唱る間、又た他の善根もなく、念佛堂を建ること稻麻林葦の如し。結句は法華眞言等の智者とおぼしき人々も、皆な或は歸依を受けむが爲め或は往生極樂の爲め、皆な本宗を捨て念佛者と成り、或は本宗をば仰げとも念佛の法門也云々（當世念佛無間地獄事ノ一節）

念佛の跋扈以て證す可からずや。新眞理を敎示し、新光明を授與せむと欲せば、勢ひ一代に跋扈せる大勢力に對て挑戰せざる可からず。日蓮は乃ち、四大格言の冒頭に於て、眞宗の根本敎義を非定して起ちぬ。

眞宗の根本敎義とは何ぞ、曰く念佛往生の理也。往生に四個あり、意念往生、正意往生、無記往生、狂亂往生、是れ也。而して日蓮が最も非定し最も排斥し



て止まざりしは、無記狂亂の二往生なりき。彼は當世念佛無間地獄事に於て、最も之を痛議なしぬ。然れども、念佛全盛の時代に於ては、偶々以て世の恨を買ひしに價せしのみ。此大膽なる一大宣言は、忽ち反動を喚起して、彼が身邊に群り來るものは悉く怨恨の毒矢にあらずむば熱罵の響きなりき。惡魔主義のインカーネーションたる穢多の兒日蓮が血液は益々狂ひ來らずむば已まざらむとせり。

之に前後して『法華眞言勝劣事』及『眞言天台勝劣事』の著あり。共に敎理を論じたるもの、吾人深く論ずるの限りにあらず。

全文永元年十二月十三日、日蓮、南條兵衞七郎に與ふる書あり。中に記して左の如く云へり

我等衆生は、根の鈍なる事、須利盤特にも過ぎ、物の色質を辨へざること羊目の如し。貪瞋は究て厚く、十惡は日々に犯し五逆をば造らざれども五

逆に似たる罪又日々に犯す十惡十逆に過ぎたる謗法は人毎に之れ有り。させる語を以て法華經を謗る人は少なけれども、人毎に法華經を用ゐず。又た用ゐたる樣なれども念佛等の樣には信心深からず。設ひ又信心深き者も法華經の敵をば責めず。何なる大善根を修し法華經を千萬部讀書寫し一念三千の觀道を得たる人たりとも、法華經の敵を責めずば、得道あり難し、譬へば朝に仕へたる人の十年二十年奉公あれども君の敵を知らず奏せず私にも怨らまず、日來の奉公皆な失て還て失を行ふが如し。當世の人々は皆な謗法の者と食召す可し。佛入滅の次の日より千年をば正法と申して持戒の人多く得道の人これ有り。正法千年の後は像法千年也、破戒の者は多く得道の者は少し。像法千年の後は末法萬年也、持戒の者も無し、破戒も無し、無戒の者のみ國々に充滿せむ。而かるを濁世と申は、濁りたる世也。濁世と申して澄める世にはすなほなる繩の曲れる木を削り直ほす樣に、非



を捨てゝ是を用ゐる也。正法より五濁漸く出來て末法に成り候へば、五濁盛に過て大風に大波の起て岸を打つのみならず又波と波とトウ〳〵と打つが如く也。見濁と申は、正像漸く過ぎぬれば纖かに邪法の一を傳て廣大の善根の正法を破る也。世間の罪にて惡道に陷る者よりも、佛法を以て惡道に陷るものは多しと見え侍り。而るに當世は正像二千年を經て末法に入て二百年、見濁盛にして惡よりも善根にて多く惡道に落つ可き時也。惡は愚癡の人も惡と知れば隨はぬ邊もあり、火を以て水を消すが如し。善は但し善と思ふ程に小善に付て大惡の起ることを知らず。所謂傳敎の聖跡あつて荒廢すれども念佛堂にあらずと云て、捨て置て其傍に新しく念佛堂を作り、彼の寄進の田畠を取て念佛堂に寄す。此等は像法決疑經の文の如くならば、功德少しと見え侍り、此等を以て、善なれども大善を破るものと知る可し。（中略）

彌勒菩薩云く、東方に小國あり、其中には唯だ大乘經の機のみ有りと。此
瞿文の如くむば、閻浮提の内にも東の小國に大乘經の機ある歟。袋公の記に
云く、玆の典緣東北の小國等にありぇぇと。法華經は東の國に緣ありとか
、れたり。安然和尚云く、我日本國皆大乘を信ずぇぇと。(中略)先德の心なら
ば日本國は純ら法華經の機也。一偈一句なりとも行せば、必らず得道なる
可き有緣の法なれば也。(中略)

又佛法流布の國に於ても、前後を勘ふ可し。(中略)前に外道の法の弘まれる
國なれば、佛敎を以て之を破る可し、佛の印度に出て、外道を破り摩騰迦
竺の法蘭震旦に來て道士を責め上宮太子我國に生て守屋を切るが如し。
佛敎に於ても、小乘の弘まれる國をば、大乘を以て破る可し、無著菩薩の
世親の小義を破るが如し。權大乘の弘まれる國をば、實大乘を以て之を破
る可し、天台智者大師の南三北七の義を破るが如し。(中略)



然るに此五十餘年に法然と云ふ大謗法の者出來て、一切衆生をすかして玉
に似たる石を以て玉を投させ石を取らせたる也(中略)。法然善道等の書置て候
程の法門は日蓮は十七八の時より知て候ひき。此比の人の申す事は之に
過ぎず。法門には叶はずして、鬪にて候也。念佛者は數千万人の方人多く
日蓮は唯だ獨り方人は一人も之れ無し。今までも生きて候は不思議也。今
年も十一月十一日に安房國東條之松原と申す大道にて申酉の時計に、數百
人の念佛者に待懸られて、日蓮は但人十人計にて物の用に値ふ者は、僅に
三四人也。射る箭は降る雨の如く打つ太刀は電の如し。弟子一人は當坐に
打殺され、二人は大事の手にて候。自身は切られ打たれ、結局は命に及た
りしが、如何が候ひけん、打ち漏されて今まで生きて侍り彌々法華經の信
心こそまさりて候へ。第四卷に云く、此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後と。
第五卷に云く、一切世間多怨難信等ぇぇと。日本國に法華經を讀覺する人是

れ多し。妻を奪ひ盜み等にて打ちはらるゝ人多けれども法華經の故にあやまたるゝ人は一人も無し。されば日本國の持經者は名計りにて未だ此經文には値ひ給はず、但し日蓮一人ころ讀み侍れ。我不愛身命但惜無上道、是れ也。されば日蓮は日本第一の法華經の行者也。若し前に立せ給はゞ梵天帝釋四天王閻魔大王に申させ給ふ可し、日本第一の法華經の行者日蓮が弟子也となのらせ給へ、よも芳心無き事は候はじ。（下略）

何ぞ其意氣の偉大にして、格調の健剛なりや。日蓮此に到て、天上天下唯我獨尊、釋迦の高潮に達せりと謂ふ可し。

『十惡は日々に犯し五逆をば造らざれども五逆に似たる罪又日々に犯す、させる語を以て法華經を謗る人は少なけれども、人毎に法華經を用ゐず。』と云ふに到ては、惡時代の惡時潮を痛罵して骨を刺すの感なからむや。

教訓を聽て教訓に背き、傳道に與みして傳道に背くは、猶ほ其時代に良心あるを見る可き歟。若し夫れ世に誡戒の存ずるを知らず、化法の存ずるを知らず、持戒無く破戒なきに到には、遂に如何とも爲す可からざるに非らずや。日蓮是を罵て像法千年の後は末法萬年也持戒の者も無く破戒の者も無し、無戒の者のみ國々に充滿す、と云へり。斯くの如くば人生は既に亡滅したるものに非らずして何ぞや。其『世間の罪にて惡道に陷る者よりも佛法を以て惡道に墮つものは多し、末法に入て二百年、見濁盛にして惡よりも善根にて多く惡道に墮つ可き時尅也』と云ふに到ては、優に人生の一大弱點を指摘せるものと謂ふ可し。

斯くの如くにして日蓮は此惡時潮を打破す可く結束したりぬ。滔々たる此惡時潮に感染せる念佛者流は數千萬人、日蓮は唯だ一人、今まで身命を保ち得たるもの、寧ろ不思議ならずとせむや。日蓮顧みて亦た此感なくむばあらざりしならむ。

日蓮に沒却す可からざる一大意氣と一大威權との存するは、吾人の既に飽まで

も說ける所也。而して其一大意氣と一大威權との發動點は、彼が恒に法華經の行者を以て自任せしの大思想に根源せずむは非らざる也。世に佛敎の奴隷たるものはあり、釋尊の奴隷たるものはあり、然かも遂に佛敎の行者たり釋尊の行者たるものに到ては絕えて吾人の見ざる所なるを奈何にせむ。今にして則ち彼を見る、穢多の兒日蓮は一躍して身五光を放ち手に天國の鍵を握る。彼はルーテル、マホメット以上の高潮に達せる也。

蓋し、一代の惡時潮を非定して、惡國土の間に一新活道を開拓せむには、日蓮の意氣と日蓮の威權と而して日蓮の壓迫力とを持するに非らずむは、到底紛々たる万衆を濟度する能はざる可し。此點に就てはルーテル、マホメットの輩、日蓮に一歩も輸する能はざる可し、況むや法然親鸞の輩をや。吾人が日蓮に向て最も多くの尊敬と最も多くの崇拜とを拂ふ所以、此の意味を離脫して遂に幾許も存せざる也。



文永三年丙寅正月六日、法華經題目抄の著作脫稿す。法華成佛の理を說けるもの也。而して傍ら念佛敎を痛罵する甚だ切也。其後半は女人に關して說ける文字多し、試みに摘錄しなむ。

天台智者大師定て云く、經には但男に記して女に記さず、今の經皆な記す云云釋迦如來多寶佛十方の諸佛の御前にて摩竭提國王舍城の良靈鷲山と申所にて八箇年の間說き給ひし法華經を智者大師親り聞食れたるに我五十年の一代聖敎を說置給ふ事は皆な衆生利益の爲め也。但し其中に四十二年の經々には女人佛になる可らずと說き給へり。今法華經にて女人も成佛すと說かせ給ひしを、佛滅後一千五百餘年（中略）天台大師と名乘りて女人は法華經を離れて成佛す可からずと定め給ひぬ。（中略）

然るに日本國の一切の女人、南無妙法蓮華經とは唱へずして、女人の往生成佛を遂げざる雙觀經等によつて彌陀の名號を一日に六萬遍十萬遍なんど

唱ふるは、佛の名號なれは巧なるには似たれども、不成佛不往生の經に依れるが故に、徒に他の實を數ふるが如し。是れ偏に無知識に誑かされだる也。然者日本國の一切の女人の敵は、虎狼よりも山賊よりも海賊よりも父母の敵よりも、法華經を敎へずして念佛を敎ふる人々こそ、女人の敵なれ

(中略)

斯くの如くにして日蓮は、女人成佛の法は唯だ夫れ法華經にありと示したり。而して法華經を語らずして念佛等を語るを目して、之れ日本國一切の女人の敵也と爲し、以て念佛を非認したりぬ。當時の日本に在て、斯かる惡罵が如何ばかり女性を感動せしめしやは、云ふに價ひせざる可し。唯だ夫れ、女性に對てだも、彼が其標榜する日蓮主義を皷吹せずむは止まざりしの熱心を見ば、夫れにて足りぬ可き歟。

越にて文永五年正月、天に天星流れ、地に井水涸れ、一大異變の來る可き兆は、



刻々に迫り來つて、天下の人心に大恐怖を與へたり。果然、日蓮が預言は事實となつて、其歲正月十八日、蒙古の大軍襲來す可しとの報は、何處とも無く人の口より人の口に傳へられて、恰かも惡魔の私語けるが如し。人心豈に戰慄せざるを得むや。

日蓮仍ち八月二十一日を以て一文を草し、遂に立正安國論を呈したる宿谷左衛門入道が許に送る。狀に云く、

其後背絶不申不審無極候　抑去正嘉元年丁巳八月二十三日 戌亥大地震日蓮引諸經勘之念佛宗與禪宗等有御歸依之故日本守護諸天善神成瞋恚所起災也若無此對治者爲他國可被破 此國之由勘文一通撰之正元二年庚申七月十六日奉付御邊故最明寺入道殿進覽之其後經九個年今年大蒙古國牒狀有之由風聞等云云如經文者自彼國責此國事 必定也而日本國中日蓮一人彼西戒可調伏者也兼知之論文勘之爲君爲國爲神爲佛可被經內奏歟委細之旨者遂見參可申

之恐々謹言

文永五年八月十三日

宿谷左衛門入道殿

日蓮印

爾り、日蓮は既に九年前に在て外難來襲の兆をトし、之を將軍家に致して曾く天下を戒飭なしたりし也。然かも凡夫凡婦、如何ぞ這般の預言に信頼しなむや。日蓮は却て之を以て國家を損し各宗を亡ぼし、併せて人の世を咒ふものとして、彈劾せられ、遂に伊豆に流罪せらるゝに到つたる也。

今や數ふれば九年の後、蒙古の兵現に對馬筑紫のほとりを探察するもの頻々として然り、而して外難來襲の說また一代天下の人心を戰慄せしめむとするの時に當て、日蓮再び狀を送して、救世救國の道を說かむとす。然かも猶ほ天下は之に耳を藉さゞりき。日蓮は更らに大なる罪を、之に依て以て買はざる可からず。嗟吁、預言者遂に國土に容れられざる乎、抑も亦た緣無き國土遂ひに救濟



可からざる歟。さはれ日蓮、彼はそも此迫害に對して、如何せむとはするぞ。憤火山的怒憤と犯すものは直に無間地獄に落ちなむと云ふなる威權とは、果して能く來る可き迫害を壓除し盡すを得るや否や。

# 第四編　龍口前後に於ける

## 英雄僧日蓮

彼が歴史は今や各ページ毎に血に染められ、彼が繁へる黒衣は垢付し儘に裂かれ、彼を咒ふの聲は彼が足跡の印さるゝ限り彼を圍繞して離れざらむとす。佛敕を蒙て世に降り、右手に天國の鍵を握り左手に法華經を持しつゝ新眞理を示し新光明を語らむとする彼日蓮、抑も此迫害を如何にせむとはする。死火山の再燼火するや、黒煙天に漲つて、四邊を燃燃し盡さずむば歇まず。嗟吁、日蓮、彼れ果して能く此くの如くなるを得るや。其持せる意氣と壓迫力とは、能く運般の迫害を壓除し反搏し盡すを得るや否や。

十數年間苦行研究の結果、佛讖に依て發見なしたる新眞理は、狂夢と呼ばれ、此新眞理と新宗敕の爲めに殉死せむを期する其身は狂人と朝られ、或は清澄寺



の法壇より、或は各宗の方人より、或は東條に於て、或は松葉ヶ谷に於て、天下の彈劾する所となり、血は法衣を染め法衣は毒手に裂け、万衆の呪語は彼を繞ふて呪殺し窒息せしめむとせり。這般の惡歴史や、到底惡遺傳の下に人と爲つたる穢多の兒に非らずむば、有し得ざる所ならむ歟。彼は眞に、ペイロンの所謂我れ惡時に生れ我血統は我をして無禮を得せしむる所の知事となしたりてふ、文字の夫の如く、益〻彼が標榜せる惡魔主義を發揮して、總ての迫害と國王と僧侶と衆生とに對て憤戰し激鬪し、此くて法華經流布の主張の爲めには何物に對ても無禮を得せしむるの知事とならざる可からざる也。法華經の爲めに害に値ふ、素より以て彼が悔ゐむとする所には非らざる可し、三類の怨敵打定て偏ふ可しとは、彼が始めに於て特筆大書せし言にあらずや。釋尊在世に在てだも、猶ほ諸人の怨嫉多し、況むや末法五百年、見濁盛にして、若し夫れ新佛敕の光明を示し釋尊の實躰を說くものあるも、惡比丘惡國民の聲は、目すに惡魔を以

てす可き而已。日蓮が一代に解されざる、素より故ある哉。

俄然として評定は、鎌倉幕府より降り來つて日蓮を見舞ひぬ。曰く、頭を刎ね可きか、鎌倉を追ひ拂ふ可きか、弟子檀那等の所領あらん者をば是を取りあげ牢にあらん者をは是を殺害し或は遠く流す可し、と。他宗を謗り日本國を咒ひ、剩へ「日本國中日蓮一人西戒可調伏者也」と放言し、傍若無人の壯語を弄して大膽にも六十餘州の兵馬の權を左右する將軍家を、愚弄し冷視し蔑如したるの咎也。佛敕によつて預言をなし、身を以て國難に殉す可く草したる破天荒の一大論文立正安國論によつては、遂に伊豆流罪の咎あり、今は安國論の奥書一部に依て、更に再度の御勘氣を買ふに到る。而して其裡面には各宗僧侶の憎怨潜伏する在て、幕府の祟りをして一層深酷ならしめたるを知らざるべからず。宗敕上の憎惡が如何ばかり悲慘の歴史を造りつゝあるやは、遠く泰西の事蹟を思ふを要せず、活歴史は目前に日蓮によつて印されつる也。



建長寺の良觀、大弘寺殿の別當、壽福寺、淨光寺、多寶寺、長樂寺。是れ鎌倉幕府の下に在て最も大なる權勢を有しさ寺院也。堂々たる寺門、紫の衣、此等は一個無學の凡骨を麗はしく包み、飾りて、彼等が口より迸出する法話の悉くは万衆を動かし幕府を動かし將軍を動かすの力あり。左れど魔王主義のインカーネーションたる一個の日蓮が信念を容易に動かし得ざりさ。之れ彼等に在て、晝夜眠る能はざるの恨み也、怨み也、愁ひ也、憂ひ也。

日蓮は四大格言を發して、一切の權大乘教を非定す可く、宣戰を布告したり、而して之に對つて抗せむとするものに更に抗せむことを附言したり、教理を以て他の教理と闘はすは公明なる戰爭也、併せて光榮ある戰爭也、左れど遂に一人の起つて日蓮が棒持し聲言する四大格言を說破するもの非らざりさ。既に教理を以て彼を破る能はず、されど彼を破らざる可からず。此時、日蓮に一の寺院なく、一の法壇を持せず、況むや一の紫衣をや、依然として垢つきたる衣一

着あるのみ、彼の法話は辻に於てされたりき、辻は彼に在て無上の光榮ある法壇たりき。此辻の法壇より發せらるゝ聲は最も森嚴にして健剛なる響を爲し、日々鎌倉の上下に轟き渡りぬ。聿に到つては權門權家の寺院、今は彼を誠るより他の策を持せざる也、仍ち幕府を動かし、此一寒僧の首を刎ねむとせり。俄然として評定書は、日蓮の草庵を見舞ひたる也。

文永八年辛未九月十二日、頼綱以下數人の兵來つて日蓮を搦め、龍の口に斬らむとす、龍の口の遭難、即ち是れ也。

八万四千の反古堆裡より一新光明を發見し、之を流布し傳道す可く惡國惡王惡民惡時潮と戰ひつる日蓮、其身は狂人と目され其言は狂語と罵られ、運命は更に彼を醜弄して死の街に起たしむ。日蓮に在て憤感此上やあるべき。然も、日蓮は毫も恨まざりき、釋尊在世猶ほ且つ怨嫉多し、況むや白法隱沒の世に在てをや、三類の怨敵打ち定て候ふ可しとは、彼が法華經を繙く其第一ページにして覺悟したりし所にあらずや。マホメットが所謂、神の爲めに戰死せむ人は不死にして樂園の鳥となり、果物を食ひ得ると自由なりとは亦た日蓮が抱持する思想と毫も異なることなし。神の敵の爲めに戰ひ、法華經の爲めに戰ふ、こは正の戰ひ也。死は寧ろ彼に在て一大光榮に非らずや。



日蓮徐ろに謂て云く、日來の甲分是れ也、此法門を弘め始めしより命を法華經に奉り名をば十方世界の諸弘の淨土に流す可し、幸なるかな法華經の爲めに鳥き頭を刎ねらるれば砂に金を替へ石に玉を買へるが如しと。靜かに起ちて南に向て坐す。

冷罵は雨の如く降つて彼に賤がれぬ。死に當て百の冷罵何爲するものぞ。日蓮笑て答へず。既にして彼の垢衣は三度四度裂かれたりぬ、彼が圓頭は傷さて、血は草を染めにき。日蓮が火山的憤怒の情は、一時に噴火し來りぬ。熱罵して云く、

日蓮は日本國の柱石也、我を失ふは日本國の柱を倒す也。今百日の內に自界叛逆の難の同士討ち起る可し、其後他國侵逼の難とて此國の人々打殺るゝのみならず只生捕にせらる可し。建長寺、壽福寺、極樂寺、等の念佛者及び禪宗の堂宇を燒き拂ひ彼が首を由井ヶ濱にて悉く切り失ふ可し。然らずは日本國滅ふ可し。

と。彼が草庵に安置したりし經藏は、彼を冷罵する聲と共に、糞泥の中へ投ぜられぬ、而して日蓮は宿谷の土の牢中に曳かれたり。申の刻、彼れ私かに牢を脫れ、鎌倉八滿に詣てゝ起願する所あり、去て龍の口に到る。兵、既に彼の來るを俟てり、彼れ南に向て掌を合せ、死の到るを運命に一任す。

忽然として滿月形の白光あり、江の島の辰巳より現はれて、隼の如く飛び來り、日蓮が坐上に落つるかと見うるや、忽ちにして背後の山上へ飛び去りぬ。白蓮開きて墨の如し、兵は斃れ、刀は折れたり。



不思議なるかな、運命は此英雄僧をして九死の中より救ひ出しぬ、佛敕を蒙つて天降せる天使は万一にして天祐の爲めに救ひ出されぬ。彼は再び鎌倉土牢中の人と爲りたり。

天下の惡氣運は益〻其度を重ねて國土何と無く騷しく、外難襲來の飛說は人の世を壓迫して、人心の痛むこと甚だし。十四日、狀あり、曰く日蓮を佐渡に流罪す可しと。當時、左衛門尉頼綱が本間六郎左衛門尉に與へし書中には、

日蓮は佐渡に遣はす可し、兩三年も候へば御赦免有る可く候、若承て下る若殿原の中にも死罪抔に行はるゝ事候ては、御預りの爲め惡あるべく候間、ケ樣に申候、恐々謹言。

九月十四日

本間六郎左衛門尉殿

左衛門尉頼綱判

寔に日蓮に怨を爲す人は必らず先づ無間地獄に墮ちなむ。此威權は慥かに、天

祐と爲つて死一等を減ぜられ、佐渡流罪を命ぜられぬ。同日、平左衛門尉に送りし書信あり（一説には八月二十二日の書信なりとも云ふ）。曰く、

一昨日罷入見參候條悅入候、抑人の世に在る誰か後世を思はざらん、佛の出世は專ら衆生を救はん爲め也。茲に日蓮、比丘と成りしより旁た法門を開き、已に諸佛の本意を覺り早や出離の大要を得たり。其實者妙法蓮華經是也。一乘の崇重三國の繁昌義眼泉に流る、誰か疑網を貽さんや。而るに專ら正路に背て、偏に邪途を行す。然る間、聖人國を捨て、鬼神瞋を成し、七難並び起て、四海閑ならず。方に今世恐く關東に歸し、人皆東風を貴ぶ、就中、日蓮生を此土に得たり、豈に我國を思はざらむ哉。仍立正安國論を造て、故最明寺入道の御時、宿屋の入道を以て見參に入れ畢はむぬ。而るに近年の間多見の程、犬戎亂浪夷敵國を伺ふ。先年勘え申す所、符合せる者也。（中略）夫れ未萌を知る者は六正の聖人也、法華を弘る者は諸佛の佛使也。而るに日蓮恭くも鷲嶺鶴林の文を開て鵝王鳥惡の志を覺り、剩へ將來を勘たるに粗ぼ符合を得たり。先哲に及ばずと雖、定て後人に希なる可き也。法を思ひ國を思ふの志だも賞さる可きの處に、邪法邪教の輩讒奏讒言の間、久しく大忠を懷て未だ微望を達せず、剩へ不快の見參に罷入る、偏に難治の次第を愁ふるもの也。伏して惟れは泰山に昇らざるものは天の高きを知らず、仍ち御存知の爲めに立正安國論一卷、之を進覽す。勘載する所の文九牛の一毛也、未だ微志を盡さず耳。抑も貴邊は時天下の棟梁也、何ぞ國中の良材を損せむ哉。早く賢慮を廻して、須く敵を退く可し世を安し、國を安するを忠となし孝と爲す矣。是れ偏に身の爲めに之を述べず、君の爲め神の爲め佛の爲め一切衆生の爲めに言上せしむる所也。恐々謹々

日蓮印

其文体よりして見るに或は八月二十二日の稿となすもの、之れ眞に近きか如し。日蓮、預言者としては國家の前途に來襲せむとする一大危難を救はむと爲し、宗教家としては權大乘の邪法を掃蕩して一代の惡時潮に抗し新眞理を世に布敎せむを期す。而して期する所、九牛の一毛だも敢行する能はずして、凡俗の誤る所と爲り、他宗の呪ふ所と爲り、或は清澄寺の演壇上に彈劾せられ、東條の迫害伊豆の流罪等頻として遑あらざらむとす。然かも猶ほ退讓の文字を知らざるもの、如く、毀らむものには益〻申す可く、反發を續繼したる也。是れ偏に一身一家の爲めに爲すに非らず、國家の爲め宗敎の爲め、身を犧牲に供するに非らずして何ぞ。今や、また再び流罪の命に接しぬ。日蓮が感慨、果して幾許。文永八年十月十日、彼は愈〻相州を發して、佐渡流罪の途に就きたり。然れども途上舟中、絕えず彼が口には題目の唱へられ彼が身には黑衣の縶はれ、而して光榮ある佛敎が今猶ほ彼が掌中に握られ居る可しとは、誰れか想ふ可きぞ。後世島帝



國々民の信仰の一中心點となつて、無限の光明を放ち、無限の威權を示し、宗敎史上一異彩を輝かしつゝある英雄僧日蓮も、當時に在て世に容られ人に容られむには餘りに高く餘りに偉に而して餘りに强かりしが如し。或は狂僧と罵られ、佛敵と誹られ、國民を呪殺するものなりと謗られし日蓮は、之れ以外の穢多の兒てふ惡遺傳を有する夫の外、世に何物だも買はれたるの證左なかりけるも。豈に亦た悲慘ならずや。

佐渡流罪前に在て、一念三千理事の著あり、十法界明因果抄の著あり、後五百歲合文の著あり、十如是事の著あり、常忍抄の著あり。其他彼が自著甚た多きが如し。

顯謗法抄中には、八大地獄の因果を明かにし無間地獄の因果の輕重を明かにし、問答料簡を明かにし、行者の弘經の用心を明かにしたり。

八大地獄とは、一活地獄、二黑繩地獄、三衆合地獄、四叫喚地獄、五大叫地獄、

六焦熱地獄、七大焦熱地獄、八阿鼻地獄也。

阿鼻地獄は無間地獄のこと也。欲界の最底大焦地獄の下にあり、此地獄は縱横八萬由旬也、外には七重の鐵の城あり、地獄の極苦に到ては前記七地獄並に別處の一切の諸の苦を以て一分として、大阿鼻地獄の苦、實に一千倍勝り、此地獄の罪人等は大焦地獄の罪人を見ること他化自在天の樂の如しと云へれば、以て地獄界に於ける最極の苦悶なる可し。而して日蓮、五逆の罪より他の罪業によつて無間地獄に隨つる事ある可しやとの問に答へて曰く、

正法を誹謗するの重罪也

と、以て彼が如何ばかり各宗の憤怨中に陷て之を說伏せむとせしやを知る可き也。

行敏訴狀之會通中には彼記して云く、

當世日本第一持戒僧良觀聖人並に法然上人の孫弟念阿彌陀佛道阿彌陀佛等



の諸聖人等、日蓮を訴詔する狀に曰く、早く日蓮を召されて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲す云云と。日蓮曰く、邪見を摧破して正義を興隆せば一眼の龜の浮木の穴に入るならむ、幸甚々々。

彼狀云く、右八万四千の敎乃至一を是して諸を非す理豈に然る可けんや(中略)日蓮偏に法華經一部を執して諸餘の大乘を誹謗す云云(中略)答て曰く、已今當の三說を誹謗して法華經一部を讚歎するは釋迦の金言也、又日蓮が私言に非らず。

と。彼は此編に於て、自己か發せし罵言を以て悉く、釋迦の金言也、日蓮が私言にあらずと斷言し去れり。而して終後に、彼は建長寺の良觀を熱罵して云く、

良觀邪義を隱さむが爲めに諸國の守護地頭雜人等と相語て曰く、日蓮並に弟子等は阿彌陀佛を火に入れ水に流す汝等が大怨敵也と。頸を切れ所領を追出せよと勸進する故に、日蓮の身には疵を蒙り、弟子等殺害に及ぶこと

數百人也。此偏に良觀念阿道阿等の上人の大妄語に出てたり。心あらむ人々は、驚く可し、怖る可し云云

念阿道阿の輩は正しく正法誹謗の罪を犯せるもの也。日蓮に罪する彼等は直に由井ヶ濱に於て誠り給ふ可し、然らずむば日本國亡滅す可き也。否な、正法誹謗の徒は、當に無間地獄に墮つ可し、と云ふ。日蓮が聲の如何に血赤色にて充されつるや。

十如是事は十個の如是を說明せるもの也。敎理に屬すれは、敢て品隲せず。秀句十勝御書の著亦た然り。

常忍鈔とは弟子富木氏に記し與へし書狀也。中に書して云く、

御文粗拜見仕候畢。(中略)總じて御心得候へ、法華經と爾前の經とを引向へて勝劣深淺を判するに、當分跨節の事に三の樣あり。日蓮之法門は第三の法門也。世間に粗は夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候。第三の法門は天台妙樂傳敎を粗は之を示せども未だ事畢らず。所詮所詮讓與末法今也、後五百歲は是れ也。但し此法門の御論談をば余は不承候。彼は廣學多聞の者也。ハヾカリミタ〳〵と候ひしかば、此方の負なんとも申付けられなば、如何し候べき。但し彼の法師等が彼の釋を知り候はぬはさて置候ぬ六十卷に無之と申すは天の責也、謗法の科の法華經の御使に値ひて顯れ候也。(中略)此より後は下總にては御法門候ふ可からず、了性と思念とを詰つる上は、他人と御論候はゞ、還て深く成らむ。彼了性と思念とは年來日蓮を毀と承る。彼等程の蚊虻の者に日蓮程の師子王を聞かす見ずしてウハの空に毀る程のオコシン也。天台法華宗のものならば、我は南無妙法蓮華經と唱て念佛なんど申す者をばアレハサルコトなんど申すだにも奇怪なるべきに、其義無き上、偶々申す人を毀りて申すアラ不思議〳〵。大進房が事前々に書きつかはし候樣に、强々とかき上させ給へ候。大進房には十羅刹の



鳥澁人
彼ハ左ル
事

付せ給て引かへし給ふと覺ゑて候ぞ。又魔王の使者なんどが付て候ひけるか、離れて候と覺ゑて候ぞ。惡鬼其身に入るはヨモノラゴトにては候はじ、事々重ね候へども、此使急き候へば夜かさて候ぞ。

轉重輕受法門は、日蓮が佐渡流罪の命に接して、相州依智を出發なす前五日即ち文永八年十月五日、太田左衛門尉、曾谷入道、金原法橋御房宛に書き送りし文也。云く、

(上略)安樂行品に云く、一切世間多怨難信矣と。此等は經文には候へども、何の世にかゝるべしとは知られず。過去の不輕菩薩覺德比丘なんどこそ身に當て讀みまゐらせて候ひけると見ゑ侍れ。現在には正像二千年はサテおき、末代に入て此日本國には當時は日蓮一人と見ゑ候。昔の惡王の御時、多くの聖僧の難に値ひ候ひけるには、又所從眷屬等弟子檀那等幾か難き候ひけむと、今を以て押量り候。今日蓮法華經一部を讀て一句一偈に猶ほ授記を



蒙れり、何況一部をやと彌々たのもし。但つゝほけなく國主までとこそ思ひ候へども、我と用ゐられぬ世なれば力及ばず候故に留め候ひ畢はむぬ。眞理を發見しては却て法の咎むる所となり、新宗敎を發現せむとしては却て舊宗敎の怨咒する所となり、國家の前途に一大豫言を放ち一大活水を濺かむとしては却て國主の激する所となる。斯くの如くにして自己が歷史の總てのページに血を染めぬるもの、正像二千年に誰か在る可しや。恐らく末法萬年と云へども日本國に於て斯かる悲哀の日記を有せむもの、日蓮の外にある可からざる也。

日蓮、今は依智に在て、流罪の日を俟ちつゝあり。靜かに法華經を繙く毎に、彼は恐らく活ける偉大の敎訓を得來りつゝあるが如し。獨り此活ける敎訓を授得するに忍びず、成り得可くむば國主にまでとこその一言は、想ふに彼が溢るゝばかりの熱情の籠れる語なる可し。然かも顧て私かに思へは、頸の坐頭の疵、これ法華經に依て得たる罪にあらずや、伊豆の流罪、龍の口の遭難、亦た之れ

法華經が與へたる咎に非らずや。斯くの如くにして、法華經が他宗より誹られ謗られ、斯くの如くにして、法華經が國主より恨まれ怨まれつるもの幾許。我と用ゐられぬ世なれば、云ひたりとて何かせむ、留め畢はむぬる彼が筐には、無限の熱情の籠れるに非らずや。

秋風吹き來て、天下の心寒かり。十月十日東洋のマホメットたる英雄僧日蓮は、復も惡運命の齎弄する所となつて、佐渡に流罪さる可く、愈々依智を發したりぬ。二十二日、越後國寺泊の津に着す。贖命重寶抄は即ち寺泊に於て彼が作せしもの也、俗に寺泊御書と號しぬ。記して云く、

今月十日也、十日相州愛甲郡依智の鄉を起ち、武藏國久目河の宿に付き、十二日を經て越後國寺泊の津に付きぬ。此より大海を渡て佐渡に至る。順風定らず、其期を知らず。路の間の事、心も及ばず、又筆も及ばず。但暗に推度す可し。素より存知の上、始めて歎す可きに非らざれば、之を止めぬ。



如來在世猶多怨嫉況滅度後、若くば、一切世間多怨難、とは法華經の敎うる所にあらずや。途上舟中の難、彼に在て何するものぞ。彼が行途には更に大なる難あるものを。日蓮、寺泊書中に述て曰く、

在世を以て滅後を推ふるに、一切の諸宗の學者等は皆な外道の如し。彼等が云ふ一の大惡人とは、日蓮に當れり、一切の惡人之に集るとは、日蓮が弟子等也。彼れ外道は、先佛の說敎流傳の後、之を謬し、後佛を怨と爲す。今諸宗の學者等亦た復た是の如し、所詮、佛敎に依て邪見を起す。轉目者は大山に轉せむと欲す。今の八宗十宗等も多聞の故に諍論を致す。云云

人生の行路難は、收めて日蓮が路程に印されたるが如し。人は彼を目するに大惡人を以てし、彼が弟子を目するに又た大惡人の集を以てす。而して此迫害は、彼を驅て佐渡に移さずむば已まざりしもの也。

何れの世に在てか、大詩人、大哲學者、大宗教家の、時代に迎へられたる事やある。平和の福音者たりしクリストに在ても、猶ほ彼は鄕土に足跡を印する能はざりしに非らずや。ルーテルの如き、カアラヱルの如き、亦た正に一代の反抗怨思を受けたるを奈何にせむ。況むや其の意氣の健剛なる主義の猛烈なる、ルーテル、マホメット、カーラヱル、クリスト以上たる日蓮に在てをや。彼が一大惡人として、一大魔王として、一代に厭嫌され忌彈されたりしもの、素より毫も怪しむ可きに非らざる也。

日蓮、更に泊寺書中に於て以爲らく、

或人日蓮を難して云く、機を知らずして暴義を立て、難に値ふと。(中略)惡口而嗔恚數々見擯出すと。數々は屢々也。日蓮は擯出數度、流罪は二度也。(中略)

當時三類の人有之、但し八十萬億那由他の諸菩薩は一人も見え給はず。潮の乾て滿たず月の虧て盈たざるが如し。淸水に月浮ひ、殖木に鳥栖む。日蓮は八十萬億那由他の諸菩薩の代官と爲て、之を申し、彼の諸菩薩の加被を請ふもの也。



爾り、當時三類の怨敵は是れ有り、八十萬億那由他の諸菩薩は一人も是れ無かりき。日蓮は實に此等諸菩薩の能を一身に鎔めて、以て末法の始め、唐の東朔の西に天降したるもの也。其抱負する所の大、標榜する所の大、意氣の健剛、格調の雄大、實に宗教史上の一異彩なりと謂ふ可き歟。

斯くて彼は、荒海を航して、佐渡ヶ島に渡りぬ。

追狀の尾に附して左の數言あり、

此人は咎なき人也、今しばらくありて許させ給ふ可し、あやまちしては後悔ある可し云云

# 第五編　佐渡流罪中に於ける英雄僧日蓮

## 上

清澄寺の法壇より追はれ、伊豆に流され、或は頸の坐頭の疵、東條松葉ヶ谷の遭難、龍ノ口の悲劇等、有うる迫害を一身の歴史に蒐めて猶ほ掌中天國の鍵を放たざる英雄僧日蓮が後年生の活畫は、收て佐渡流罪以降に在るが如し。

大躰よりして視るに、日蓮が歴史は大別して前後の二幕に盡く。則ち、寺泊の著述に到る迄の歴史は、彼が前半生を記したるものなる可く、佐渡流罪以降の歴史は其後半生を包藏せるもの也。而して、彼が前半生の歴史……寧ろ清澄寺前後に於ける日蓮……は、彼の修養時代に屬し、夫より龍の口に於ける遭難に到る迄は、彼が先天的に授與し來つたる日蓮主義の曙光を示せしものにして、



降て佐渡以降、即ち彼が後半生の歴史に到ては、彼が標榜する折伏主義愈々露骨となり、彼が抱持する惡魔主義彌々猛烈となり、惡遺傳性の下に呼吸せる彼が面目躍如として歴史上に活けるを認むるを禁じ能はざる可し。彼が自筆の文章を通じて彼を視るも、彼が全身を環れる血液は最高潮に昂し來つて、意激し情燃え、筆端血の迸出するの槩あり。其議論は彌々雄大となり、構議縱横、格調健剛、加ふるに特得の魔王主義は各ページを染め拔いて、恰かも暗夜惡魔が咀呪を逞うするの趣あるが如かり。之れ正に、惡遺傳的穢多の血液の、遺憾なく發揮されたるもの歟。

然れども、彼が標榜する惡魔主義折伏主義の脊後には、恒に、佛勅の握られ居るを思はざる可からず、法華七字の題目の唱へられ居るを認めざる可からず、四大格言の皮下一重には、恒に、反古堆裡より發見されたる一大新眞理の伏在せるを識らざる可からず。彼は天國の鍵を以て樂園の門戸を開放し、新光明を

世に示さむ爲め、世と諍鬪し人と諍鬪し、有ゆる折伏主義を發揮して、惡國賊王惡臣惡民等に挑戰せるもの也。而して是れ彼の私意に非らず、實に釋尊の敵を齎して然る也。之を以て彼は、日蓮を怨む可くむば先づ釋尊を怨まざる可からずと、宣言せずむば已ざりき。茲に到て、彼が意氣、殆むど絶大の域に達せるに非らずや。

佐渡に於ける日蓮は、武藏の前司本間重連が酷待の下に、新穗の鄕塚原に、衣手寒く世の不遇を歎ぎたりぬ。澤深うして草繁く、死人を捨つるの野の中也。塚の上に崩れ堂あり、佛もあらず僧もあらず、落葉樒を埋めむばかり、雨露漏るに委せて、人跡の印されざる事に幾歲。日蓮は斯かる堂宇を無上の樂土として、星月の光に經文を繙くの哀れなる身となりぬ。然れども、此等は偶々日蓮をして、其日蓮主義を極端までに發揮せしむる感憤の動機となりしもの、日蓮が爲めには怨む可きに非らずして、寧ろ謝す可きの賜に非らずして何ぞや。



亡骸の上なる塚原の、寂寞なる生活は、日蓮をして優に十數種の著述を爲さしむるに餘りありたり。立正安國論、報恩抄と共に日蓮集中の三大著書と傳へらるゝ開目抄の著作は、翌文永九年壬申二月を以て脫稿せしもの也。妙宗僧侶の最も貴ぶ所、弘く世に普かれば、左には書中二三の文字を斷片として摘錄しなむ。

涅盤經に末代濁世に謗法の者は十方の地の如し正法の者は爪上の土の如しと書れて候は、如何し候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、能く〳〵思惟ある可し。

世間の罪にて惡道に墮る者は爪上の土、佛法によつて惡道に墮る者は十方の土、俗より僧、女より尼、多く惡道に墮つ可し。

日本國に此を知れるもの但し日蓮一人也。此を一言申し出すならば、父母師匠國主の王難必らず來る可し、云はずば慈悲無きに似たり。法華經涅槃

經等に此二邊を合見するに、云はずは今生は事なくとも後生は必らず無間地獄に墮つ可し、云ふならば三障四魔必らず競ひ起る可しと知りぬ。二邊の中には云ふ可し、王難等出來の時退轉す可くば一度に思止む可し。斯くやすらひし程に寶塔品の六難九易起れり。

既に二十ヶ年が間此法門を申すに日日月月年年に難は重なる。少々の難は數知らず、大事の難四度也。二度は且くをく王難すでに二度に及ぶ。今度は我身命に及ぶ。其上弟子と云ひ檀那と云ひ、僅かの聽聞俗人なんど來て重科に行はるゝこと、謀叛なんどの者の如し。

小兒に灸治を加ふれば必らず父母を仇む、重病の者に良藥を與ふれば、定口に苦しと愁ふ。在世猶ほ斯くの如く然り、乃至像末邊土をや。山に山をかさね、波に波を重ね、難に難を加へ、非に非を增す可し。

法華經第五卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生れずば、殆むと



世尊は大妄語の人、八千萬億那由佗の菩薩は提婆が盧遮罪にも過ぎぬべし。

經に云ふ、有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者云云と。今の世を見るに日蓮より外の諸僧誰人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖を加へらるゝものあるか。日蓮なくは此一偈の未來記妄語となりぬ可し。

惡口罵詈の到るを以て本懷となし、是れ勸持品の偈に合するもの釋尊の豫言に合するものとなせり。之を絕叫する日蓮の文は、殆むと有うる熱を濺き來て、世の熱性に訴えすとするものゝ如し。日蓮は此點に於て、優に大詩人たる性格を持するに似たり。

理性を以て主格となす冷性なる頭腦の多くは、哲學者たるに適し、情性を以て主格となす熱血的頭腦の多くが、詩人たるに適するは、茲に云ふに及ばざる可し。吾人を以て視るに、日蓮は哲學者たるよりも、より多く詩人たるに適するが如し。彼をして英國人たらしめば、彼は正に大ベイロンたらむ、大カーライ

ルたらむ、大クルムウエルたらむ。不幸にして極東一小帝國に天降す僅かに一日蓮を以て終りたるのみ。夫れ一日蓮也、然れども吾人國民は、二千五百年間の長き歴史に於て、一日蓮の外、遂に折伏主義の行者を有せざるに非らずや。平和主義の鼓吹者傳道者、若くは宣教師は、何の世何の國土に於ても、吾人は殆むど見飽く程に接したり。乞ひ問はむ、彼等の標榜し主張とするなる平和主義は、何の世何の國土に在て、幾許の勢力を有し幾許の實在を有し、將た亦た幾許の實行を有せるや。想ふに此詰問に應じ得る程の勇氣を把持するもの、恐らく甚だ僅少なるべきを愁ふ。

吾人の狹き見解を以てするに、平和主義は必竟、弱者が有する對強的唯一の防禦武器に過ぎざる也。一代の強者は決して平和を口にせず、彼は戰へば也、戰て以て新天地新樂園を開拓すれば也。平和を云ふを止めよ、汝は弱者たれば也。日蓮は一代の強者也、彼は斷して平和を口にせず、自から折伏主義の傳道者を



以て任し、之を鼓吹しつゝ惡國惡王惡臣惡民等と實際的に戰つたりき。而して其戰ふや、敢て抽象的理性主義に偏せず、寧ろ多感多恨的詩人的情性を以て、總てを具体的に發揚したりき。之を以て、日蓮が半面は、偉大なる詩人也、詩人的感興を有せる也。彼は直に以て、ペイ ンたり得可く、カーライルたり得可く、而してルーテル、マホメッ、ノクムウエルたり得ること最も容易なるもの也。

日蓮が他に對して放つ所の誹謗や、嘲聲にては非らざりき、罵聲にてありき、冷罵にては非らざりき、熱罵にてありき、彼が身躰には惡遺傳の血液の絶えず激憤せる也、熱せる彼が主張の總ては、血と湧て口頭に露はれ筆端に迸出せずむば歇まざりき。

此等は苟も彼の文章を一瞥したるものゝ必らずや認識する所なる可き歟。開目抄の雄篇に到ても、情を以て理を說きたるの點、甚だ多きを見る。

雲は月をかくし讒臣は賢人を隠くす、人譖すれば黄石も玉と見に誤臣も賢人かと覺う。今濁世の覺者等彼等の讒義に隠れて舞量品の玉を翫はず、又天台宗の人々も誣かされて金石一同の思をなせり。

日本國に法華經の名のみあつて、得道の人一人もなし。誰をか法華經の行者とせむ。寺塔を燒て流罪せらるゝ僧侶は數を知らず、公家武家に諂て憎くまる高僧これ多し。此等をや法華經の行者と云ふ可きか。佛語空しからざれば、三類の怨敵既に國中に充滿せり。金言の破る可きかの故に、法華經の行者なし、如何せむ、如何にせむ。抑も誰れの人か衆俗に惡口罵詈せらるゝ、誰の僧か刀杖を加へらるゝ、誰の僧か法華經の故に公家武家に奏する、誰の僧か數々見擯出と度々ながさるゝ、日蓮を除きて外に日本國に取出でむとするに人なし。

我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、と願ひし願ひ破る可からず。



宗教の腐敗を革新し、一代の思潮を廓清し、國家の前途を預言して、島帝國の柱となり眼目となり大船とならむと願ひし願ひ、如何なる迫害の降下するも破る可からずと謂ふ。其意氣の高潮、塚原の破堂より張つて直に冲天に飛躍せむとするの槪あらずや。茲に到て日蓮の自信、實に偉の極に達せりと謂ふ可し。

彼は更に此編に於て、一念三千の理を說きぬ。一念三千こそ佛になる可き道なれとは、彼の聲を大にして叫ぶ所也。

日蓮は日本國の父母也(中略)。日蓮が御勘氣を蒙れば、天台眞言の僧侶悅ばしく思らむ。且は無慚なり、且は奇怪なり。(中略)日蓮が流罪は、今世に在て小苦なれば歎かはしからず。後世には大樂を植ゑければ、大に悅ばし〳〵。

現世の彼を容れざるは、後世の彼を容るゝ左券ならずとせむや。如來在世、猶ほ且つ怨嫉多し。況むや末法五百年、三類の怨敵、濁世に跳梁して、彼に對で

咀呪を飛ぐこと、豈に敢て怪しむを要せむや。是等と戰ひ鬪ふこと寧ろ日蓮が當代に天降したるの先天的使命にして、是れ直に以て後世に大樂の種を植ゑつゝあるもの也。

鎌倉辻の法壇に幾多の血を染めて、今は雲山百里の落葉中に坐す、顧れば、當年の弟子檀那等、今將た如何にかしつる。日蓮、これを懷ふの情に堪うる能はず、開目抄のなるの翌三月二十日、一書を草して、弟子檀那等を見舞ひぬ。

京鎌倉に軍に死る人々を書き付てたび候へ、外典抄文句二玄四本未勘文宣旨等これへの人々もちてわたらせ給へ。佐渡國は紙候はぬ、上面々に申せば煩あり、人に漏るれば恨みありぬ可し。此文を志あらむ人は寄合て御覽じ、料簡して心をなぐさませ給へ。世間にまさる歎だに出來れば、劣る歎は物ならず。當時の軍に死する人々實不實は置く幾か悲しかるらむ。イサハの入道サカへの入道、如何になりぬらむ。カハへの山城掛行寺殿等の事



如何にと書付てたぶべし。外典抄貞觀政要すべて外典の物語八宗の相傳等此が無くしては消息もかゝれ候はぬ。構て給ひ候ふ可し。

死人の屍の埋れる亂塔の上、露繁くして落葉堆き破堂の中、佐渡には紙候はず、之れ無くば消息もかゝれず、と云ふ彼が聲の如何に悲しきよ。

左れど彼は攝受折伏時に隨ふ可しとの論法を以て、更に左の如く叫びむぬ。

紙なからむ世には、身の皮を紙とし、筆なからむ時は、骨を筆とす可し。

と。身の皮を以て紙とし、骨を以て筆とす可し、と謂ふ。惟ふに身皮と骨とを以て記さる可きものは、世界の總ての文字中に在て最も高貴なるもの歟。日蓮が文の如きは眞に身皮と骨とを以て記されたるもの、句々血を發し言々熱を帶ぶる、宜なる哉。

此論法は、更に一轉して、

儒教道教を以て釋教を制止せむ時は、道安法師、慧苑法師、法道三藏等の如

く、王と論して命を輕くす可し。

と云ふに到る。

一身一躰は帝王の支配下に屬すれど、心は以て隨ひまつる可からざる也。主義の異なるに於て、見解の異なるに於て、信仰の異なるに於て、帝王と論して命を輕くする何かあらむ。帝王は能く一身一躰を左右すれど、遂に思想を動かすの權利なきもの也。日蓮は實に此覺悟を以て、帝王の勢力範圍外なる思想界の大帝王たりき。

畜生の心は弱きを壓し、強きに恐る。當世の學者等は畜生の如し、智者の弱きをあなつり王法の邪を恐る、諛臣と申すは是れ也。強敵を伏て始めて力士と知る、惡王の正法を破るに邪僧等が方人をして智者を失はむ時は、師子王の如く心をもてる者、必らず佛になる可し。例せば日蓮が如し。是れ怒れるには非らず、正法を惜む心の強盛なる可し。怒るものは必らず敵



に値て恐るゝ心出來る也。

一代の人心を罵り盡して毫も餘さず、師子王的の諍鬪主義者を以て最後の勝利なりと云ふ所、是れ日蓮の面目を活躍せる也。

日蓮は此關東御一門の棟梁也、日月也、龜鏡也。日蓮去る時は七難必らず起る可し。

世間の愚者の思に云く、日蓮智者ならば何ぞ王難に値はむと。日蓮兼ての存知也。父母を打子あり、阿闍世王也、佛阿羅漢を殺し血を出すものあり、提婆達多是れ也。天臣これを賞め、瞿伽利等これを悅ぶ。日蓮當世には此御一門の父母也、佛阿羅漢の如し。然るを流罪して主從共に喜悅する哀に無慚也。謗法の法師等が自禍の既に現はるゝを歎きしに故かくなるを、一且は悅ぶなる可し。後には彼等が歎き、日蓮が一門に劣る可からず。（略下）

斯の如く草して、日蓮は、鎌倉なる弟子檀那を見舞ひぬ。

之より先、仝年正月、佐渡の念佛僧數百人、本間重連に迫て日蓮を刺殺せむとす。本間重連、之を慰め、鎌倉よりの狀に『死罪などに行はれては御預りの爲め惡かる可く候』との添狀あれば、刺殺は無用也、宜しく塚原の堂に赴き、教理を以て彼を折伏す可しと傳へたるより、僧侶共衣を連ねて、塚原に押寄せけれども、一人の日蓮を破り得る者無くして、却て彼が爲めに折伏さるゝに到つたり。

日蓮、此時の狀を記して云く、

今年正月十六日十七日に佐渡國の念佛者數百人、印性房と申すは念佛者の棟梁也、日蓮が許に來て云く、法然上人は法華經を拋てよと書かせ給ひて、一切衆生に念佛を申せと給ひて候、此大功德に御往生疑ひなしと書付て候を、山僧等の爲めに流されし、如何これを破り給ふ、と申しき。鎌倉の念佛者よりも遙かに果敢なく候ぞ。



と。日蓮や、鎌倉殿中、紫衣を以て縶はれたる幾多の高僧碩學を敵として、既ひしもの、佐渡國の念佛者流が如き、素より多く彼を煩はすに足らざりしなる可し。

猶ほ、日蓮、鎌倉の弟子等に送りしものゝ追申中に記して云く、

各々我が弟子とならむものは、深く此由を存せよ。設ひ身命に及ぶとも、退轉すること莫れ。

と。弟子檀那等を誡しめしもの也。

仝年五月五日、眞言諸宗違目の著なる。中に記して、左の如く云へり。

日本の法然これを誤て、天臺眞言を以て雜行に入れ、末代不相應の恩を爲して、國中を誑惑すること、長夜に迷ひたり。之を明かにするの導師は、但日蓮上人のみ。

日蓮、日本國人の爲めに、賢父也、聖親也、導師也。之を云はざれば、一

切衆生の爲め慈み無し。

日蓮、既に日本國の王臣等の爲めには、爲彼除惡即是彼親に當れり。此國既に三逆罪を犯す。天豈に之を罰せざらむや。

諸天定て日蓮を知る歟、日月は十方世界の明鏡也。諸佛定て日蓮を知る歟、之を疑ふ可からざる也。但し先業未だ盡きず、日蓮流罪に當れば、教主釋尊衣を以て之を覆ふ歟。

一代に容れられず、万衆に誹謗さるゝ共、法華經の行者、何ぞ天祐なからむや。落葉深き處に縱令衣手寒くとも、教主釋尊は必らず衣を以て彼を覆ふ可き也。

全じく二十五日に脱稿せしは日妙書也。雲山童子と大鬼神との問答を記せる條頗る興味あり。云く、

昔雪山童子と申す人ありき。雪山と申す山にて、外道の法を通達せしかども、未だ佛法を聞かず。時に大鬼神あり説て曰く、諸行無常是生滅法、と。



只だ八字計りを説て後を云はず。時に雪山童子、此八字を得て悦ぶこと極なし。然ども半なる如意珠を得たるが如く、華吹きて菓ならざるに似たり。殘の八字を聞かんと申す。時に鬼神の云く、我數日の間飢饉にして正念亂るゝ故に、後の八字を説き難し、食を與へよ、と。童子聞て曰く、何物をか食とするや。鬼神答て曰く、我れ人のあたゝかなる血肉を食する也、我れ飛行自在にして須臾の間に四天下を廻て尋ぬれども血肉を得難し。人を殺して天守る故に科無ければ殺害する事なし難し。と。時に童子云ふ、我身を布施として後の八字を習得せむと。鬼神云ふ、汝は智者也、我をすかさむずらむ。童子答て曰ふ、死屍に金銀をかへむに、是をかへざるや。我徒らに此山にして死なば、鵄梟虎狼に喰はれて、一分の功德なかる可し。後の八字にかへなば、糞に飯を替るが如し。鬼神云ふ、我れ未だ信ぜず、證人あり。童子答て云く、過去の佛も立て給ふ證人あり大梵天王釋提桓因日月

西天等、と。是に鬼神後の偈を說かむと申す。童子、身に着たる鹿の皮を脫て坐にしき、跪跪して此坐につき給へと請す。大鬼神此坐に付て說て曰く、生滅々已寂滅爲樂、と。童子此偈を習ひ、學むで、若は木、若は石等に書付て、木に登て身を大鬼神の口に投入し給ひぬ。

と。如何ばかり興味多き會話ならずや。雪山童子と大鬼神とを以て當世に配す、日蓮は正に大鬼神ならむ。

世に鬼神は多し、加かも千古發見し得ざる大眞理を握れる大鬼神に到ては、遂に其片影だも現はさざる也。

日本國に紙なくは、皮を剝く可し。日本國に智者無うして法華經を知れる鬼神一人出來せば、身を投す可し。

日蓮は、日妙書中、斯の如く叫びぬ。法華經を知れる鬼神とは、是れ何人ぞ、天國の鍵を握せる鬼神とは、抑も是れ何人ぞ。佐渡島中、屍骸の亂れたる上に



坐せる日蓮彼自身に非らずして何ぞや。

日蓮は、此書中に於て、僅かに女人に關して說けり。曰く、

山人は鹿を取るに賢く女人は物を晴疑するに賢しとぞ經文には明かにされたれ、未だ佛法に賢しとは聞かず。女人の心をは淸風に譬たり、風はつなぐとも、取り難きは女の心也。女人の心は水に繪かくに譬たり、水の面に文字留まらざるが故也。女人をは狂人に譬へたり、或時は實也、或時は虛也。女人をは河に譬へたり、心すなほならざる故也。

水に描く文字に譬へ、狂人に譬へ、透りたる河に譬へたるもの、面白き譬へならずや。斯かる女人も、猶ほ法華經のオールマイティによつて天國の樂園に入るを得可しとは、日蓮の語る所也。

日蓮、日妙書の末尾に於て、記して云く、

相州鎌倉より北國佐渡の國まで其中間一千餘里に及べり。山海遙かに隔て

、山は峨々たり海は滔々たり。風雨時にしたがふ事なし。山賊充滿せり。宿々とまり〳〵、民の心虎の如く、犬の如く、狼の如し。

と。佛法末世の日本、眞に墮落し畢はむぬるかな。

梵音聲書は、同年九月八日の脫稿にかゝるもの也。之に前後して祈禱抄なる。一念三千の成佛を說き、法華經の祈を以て祈とせば、總ての靈驗ある可しと說けるもの也。

經王兒鈔つゞいてなる。四條氏に與えたるの書也。

種々送り給ひ候ひ畢はむぬ。(中略)今の世は濁世と申して亂れて候也、其の上眼前に世の中亂れて候へば、皆人今生には弓箭の難に値て、修羅道に墮ち、後生には惡道疑ひなし。(中略)

如何に申さじと云へども、毀たむ人には彌よ申す可し。命生て御坐者、御覽ある可し。又如何に唱とも、日蓮に怨をなせし人々は、先づ必らず無間



地獄に墮ちなむ。

恐ろしいかな、如何に佛敎を信仰し如何に善美なる祈禱を爲すとも、日蓮に怨をなせし人々は先づ必らず無間地獄に墮ちざる可からずと云ふ。彼の前には千百の論理も詮無きに均し、彼は千百の論理の上に屹然として睥睨する魔神ならずして何ぞ。其凡俗たると僧侶たると比丘尼たると高儒たると國王たるとに係らず、彼を犯すものは先づ阿鼻大地獄に墮ちざる可からず。恐ろしいかな。

末法濁世に入て、世は亂れたり、惡氣運は一代の日本を掩ひ盡して、天に星流れ、地に井水涸れ、邪法邪師國土に跳梁して、天日微かならんとす。心あるもの、如何に云はざらむとするも禁ずる能はんや。左るにても、毀らむ人々には彌々申す可しと咆哮する日蓮の意氣の何ぞ夫れ荒さや。例へはヴォルムスの議席に起て羅馬法王を彈劾しつゝあるルーテルの聲あるが如し。

次てなりし祈禱經狀、即ち最蓮房に與にし書の冒頭には、

御札の旨委細承り候ひ畢はむぬ。兼ては末法に入て法華經を持するものは、三類の强敵を蒙り候はむ事は、面拜の時、大概申し候ひ畢はむぬ。佛の金言にて候上は、不審を致す可からず候歟。然らは即ち日蓮、此法經華を信し奉てより、或は頭に疵を蒙り、或は打たれ、或は追はれ、或は頸の坐に臨み、或は流罪せられ候程に、結句は此の島まで遠流せられ候ひぬ。何なる重罪の者も、現在計りこそ罪科せられ候へ。日蓮は三世の大難に値ひ候ひぬと存候。

日蓮は現在は申すに及ばず、過去未來に至る迄、三の大難を蒙り候はむ事は、只偏に法華經の故にて候也。日蓮が三世の大難を以て、法華經の三世の利益を覺食され候へ。

と書き記しぬ。清澄寺の法壇より追はれ、鎌倉辻の說法を迫害され、伊豆の流罪、龍の口の遭難、顧みれば法華經の爲めに得たる惡國惡王惡民惡僧等の崇り



に外ならず。新宗敎の爲めに新眞理の爲めに、罪を國土に得、彼に在て何の悔うる所ぞ。帝王は身を支配し得るも、能く思想を左右し能はざる也とは、彼が放言して憚からざる所に非らずや。

翌文永十年二月十六日に書き記したる妙法曼陀羅羅供養事中には、日蓮日本國の當代を罵りて、左の如くに云ひたり。

物に譬ふれば、父母を殺せる罪、謀叛を起せし失、出佛身血の重罪にも超たり。三千世界の一切衆生の眼をぬきたる罪よりも深く、十方世界の堂塔を燒き拂へるよりも超たる大罪を、一人して作れる程のもの、日本國に充滿せり。爾れば、天は月日に眼を瞋らして日本國を睨み、地神は怒を作して時々に身を振ふ也。然して我朝の一切衆生、皆我が身に失なしと思ひ、必らず往生す可しと思へり。

新眞理の傳道者を呪ひ、新宗敎の發見者を呪ひ、新救世主を呪ひ、法華經の行

者を呪ふもの、是れ三千世界の一切衆生の眼を抹めたる罪よりも深きに價す。而して當代の日本は、斯かる罪人を以て充滿されつゝある也。天神の眼を瞋らし、天祇の心を忿らして、災しつるもの、素より怪むを要せざらむ。星は絶えず流れ、地は絶えず震ひつゝあり。

而して是れ誰れの罪ぞ、嗚呼是れ誰れの罪なるぞ。

日蓮は、之を同書中に於て宣告せり。

日本國中の一切衆生、斯の如し。女人よりも男子の禍多く、男女よりも尼の禍は多し、尼よりも僧の失は多し、持戒よりも智者の料は重かる可し。

と。國民よりも國臣の罪は重く、國臣よりも國王の罪は重き也。而して此等は、癩病中の白癩病、白癩病中の大白癩病なり。

嗚呼、遂に渡す可からざる歟。日蓮は之に對して尋ゆる奮鬪を試みざる可からざる也。



次て三月二十五日には觀心本尊鈔の著あり、一念三千の理を說けり。二十六日、

全副狀に云く、

帷一重、墨三挺、筆五管、給ひ候ひ畢はむぬ。觀心の法門少々之を說し、太田殿敎信御房等に奉る。此書、日蓮身に當るの大事也。之を秘して無二の志を見ば、之を開招す可き歟。此書は難多く答へ少し。未だ之を聞かざるの輩人は、耳目之を驚動す可き歟。設ひ佗見に及ぶとも三人四人坐を並べて讀む勿れ。佛滅後二千二百二十餘年、未だ此書の心あらず、國難を顧みず五百歲を期して、之を演說す。乞願くば一見を歷るの末輩、師弟共に靈山淨土に詣でゝ、三佛の顏貌を拜見しなむ。恐々謹々。

文永十年太歲癸酉卯月二十六日　　日蓮　花押

一念三千の大眞理は、釋迦以來未だ曾て如何なる高僧も說かざる所。日蓮、則ち此一大新眞理を發見して、其經緯線上に新宗敎を樹立せむとす。前代未聞の

一大事業に非らずや、一大難事業にあらずや。

吾人が、右記の副狀を一見して、大に得る所は、日蓮の文章に偉大なる威權の存すること、即ち是れ也。

文章上に於ける威權なるものは、抑も如何ばかり高價を有するやに就ては、吾人既に千万言を費したり。今吾人をして更らに此に繰返すを厭はざらしめよ。

古來文章を論ずるものは多し、然かも遂に一言の威權に就て言及ぼすものを見ざる也。夫れ既に威權を重せず、日本文學の總てのページが一個の威權だも有せざる、毫も怪しむに足らざるに非らずや。奈良平安朝の文學に目を瀉げ、室町鎌倉の文學に眼を濺げ、若くば闇黑時代若くば元祿時代に於ける總ての文學を繙き見よ。彼等如何の威權を持して記されたるや、如何の威權を有して印されたるや。彼等の或るものは雄大也、彼等の或るものは縱横精勁也、高渾洒脫也、悲愴悲哀也。然かも遂に一ページの威權をだに有せざるに非らずや。吾



「マホメットの主義」

人は不幸にして、一個威權の鏤刻されたる名譽ある文學史を有する能はざるの國民たるを恨むの情禁し能はざる也。

「マホメットのコーランを繙くものは、何人たりとも無限の威權の彼紙上に露出するを得認む可し。七度び神に祈禱して惡魔の影てふ劍を手にしたる彼のクロムウエルが全身を進つて現はるゝものは、正に是れ一大威權にあらずや。羅馬法皇の根本教義を否定してサキメニーの一寒僧此に起て汝等の總てより強しと絶叫せしルーテルを見よ。彼等の聲には恒に無限の威權の放たれつゝを認めずや。而して其祖先に光榮ある彼等を有するの大英國民大伊太利國民アラビヤ國民は名譽なる哉

マホメットのコーランが、宗教文集中一大異彩を放てる所以を思へ、彼の折伏主義には一大威權の具せられたるを認む可し。偶像崇拜は素徒爾のみ試に之に逐るに油を以てせよ、蟻蠅直に來て之に粘着するに非らずや、汝に告ぐ是れ木

片也、神に非らざる也、情無きの木片必竟何爲るものぞ、とはマホメットが示せる折伏主義の威權也。人の心靈は帝王の權力も將軍の威力も能く號令する能はざるもの也、獨りマホメット其處に主權して荒暴を逞うす。折伏主義の旗は無限の威權に潤色されてコレーイシュ族の上に飜され、我は是れ神の預言者也と云ふの威權は、マホメットがコーランの各ページを通して發揮されたる一大精神に非らずや。

奈良平安朝の優美なる文學の花に醉ひ、室町鎌倉の剛壯なる記事文に讃美し、若くは元祿前後の凄惨なる非劇史に泣くことを得るの日本國民は、未だ此かる威權の光に浴するの光榮を有せざるを奈何せむ。

此間に一日蓮あり、吾人の前に去來す。最高潮の意氣と驚く可き壓迫力とは、恒に無限の威權を持して宗教歴史上に耀けるに非らずや。怒濤逆立てる思想の海に折伏主義の旗を飜えして以て洋上に號令せし彼が風丰の如何に威權を以て



充されつるよ。猛惡と威權とを以て潤色されたる折伏主義の權化は、茲に始めて我日蓮に就て其實在を見ることを得る也。彼は魔王の如くに戰ひ、魔王の如くに號令し、魔王の如くに威權を把持す。犯すものは直に無間地獄に墜落せざる可からざる也。

吾人は、吾人の祖先に彼を有するを無上の光榮とす、吾人の疲れたる思想は、屢々彼に對て走せ、歴々彼に由つて活水を灑かれつる也。吾人は、吾人の歴史中に於て、活ける威權を認め得るを他に誇らむとす。日蓮が持する威權は、實に日本思想界に獨歩せるもの也、眞珠の夫よりも天國の花の露の夫よりも、更らに幾千万大の光輝を發しつゝあるもの也。

## 下

惡逆傳の血の迸る所、怒濤は沫立ち、血赤色の旗は飜へる。穢多の兒日蓮は今

や戰の兒と化し去りたり、彼が號令の聲は熱を帶び、彼が叱呵する筆端には怒濤漲奔す。舒ては遺文錄數千万言となり、卷ては一念三千七字の題目となるの主張、悉く是れ惡國惡王惡臣惡民に對するの宣戰狀に非らずや。彼は海賊の如く戰ひ、海賊の如く號令す、折伏主義の旗は彼が號令の響く限りに、翩翻として荒暴の洋上に飜へれる也、例へばサンデイ砂漠に於けるイスラムの旗の如し。而して彼が自筆の文字中に於て、彼が標榜し把持する所謂日蓮主義の、最も發揚されたるものは文永十年五月中に起稿せし如說修行抄なりと爲す。吾人、今其大部分を摘錄して、此一大英雄僧が、如何に世を罵り、如何に世を嘲りたるかを凝視す可し。

夫れ以れば末法流布の時、生を此土に受け、此經を信ぜし人、如來の在世より猶多怨嫉の難、甚だしかる可しと見えて候也（中略）。何に況むや末法今の時は、教機時刻當來すと云へども、其師を尊ぬれば凡師也、弟子又た闘



諍堅固、白法隱沒して三毒强盛の惡人等也。故に善師をば遠離し、惡師には親近す。其上眞實法華經の如說修行の行者の師弟檀那とならむには、三類の敵人決定せり。されば此經を聽聞し始めし日より思ひ定む可し、況滅度後の大難、三類の怨敵甚だしかる可しと。然るに我が弟子等の中にも、兼て聽聞せしかども、大小の難來る時は、今始めて驚き肝を消して信心を破りぬ。兼て申さゞりける歟、經文を先として猶多怨嫉況滅度後、況滅度後と朝夕敎へしこと是れ也。予が或は所を逐はれ、或は疵を被り、或は國度の御勘氣を蒙りて、遠國に流さるゝを見聞すとも、今始めて驚く可きに非らざる物をや。（中略）

釋尊は法華經の爲めに、今度九横の難に値ひ給ひて、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、師子尊者は頭を刎ねられ、天台大師は南三北七にあだまれ、

傳敎大師は六宗に悟まれ給へり。此等の諸菩薩大聖は、法華經の行者にして、而かも大難に値ひ給へり。此等の人々を如說修行の人と云はずむば、何くにか如說修行の人を尋ねむ。然るに今は鬪諍堅固、白法隱沒なる上、惡國惡王惡臣惡民のみ在て、正法に背き、邪法邪師を崇重すれば、國土に惡鬼亂れて三災七難旺に起れり。斯かる時刻に日蓮佛敎を蒙りて、此土に生れけるこそ、時の不祥なれども、法王の宣旨背き難し（中略）。

佛敎を修行せむには、人の言は聽く可からず、仰いて金言を守る可き也。佛敎を修行せむには、攝折二門を知る可き也。一切の經論此外に出でず。されば國中の學者等、佛法をアラ〳〵學すと云へども時刻相應の道を知らず。四節四季取々に替れり、夏は熱く、冬は冷たく、春は花咲き、秋は果なる。春は種子を下して、秋は果を取る可し。秋種子を下して、春果を取らむに、豈に取る可けむ耶。極寒の時厚き衣は用也、極熱の夏は何かせむ



涼風は夏の用也、冬は何かせむ、佛法も亦た斯くの如し。小乘流布して得益ある可き時もあり、權大乘流布して得益ある可き時もあり、實敎流布して佛果を得可き時もあり。然るに正像二千年は小乘權大乘流布の時也。末法の始めの五百年には、純圓一實の法華經、廣宣流布の時也。此時は鬪諍堅固白法隱沒の時と定めて、權實雜亂の砌也。敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し、敵無き時は弓箭兵杖何にかせむ。今の時は權敎即ち實敎の敵と成る也。一乘流布の時代權敎有て敵と成る、まぎらはしくば實敎より之を責む可し。是を攝折二門の中には法華折伏と申す也。天台云く、法華折伏破權門理云云と。誠に故ある哉。然るに攝受たる四安樂の修行を今の時行するならば、冬種を下して春果を求むる者にあらずや。鷄の曉に鳴くは用也。宵に鳴くは物怪也。權實雜亂の時、法華經の御敵を責めずして、山林に閑ち籠り、攝受を修行せむは、豈に法華經修行の時を失ふ可き物怪にあらずや

されば末法今の時、法華折伏の修行をば、誰か經文の如く行し給へる。誰人にも坐せ、諸經は無得道墮地獄の根源、法華經獨り成佛の法也、と音も惜まず喚はり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。三類の强敵來らむことは疑ひ無し。我等が本尊、釋迦如來は在世八年間折伏し給ひ、天台大師は三十餘年、傳敎大師は二十餘年。今、日蓮も二十餘年の間、權理を破す。其間の大難、數を知らず。佛の九横の難も及び及ばず、恐らくは天台大師も傳敎大師も、法華經の故に、日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只だ惡口怨嫉計り也、是れは兩度の御勘氣、遠國に流罪せられ、瀧の口の頸の坐、頸の疵、其外惡口せられ、弟子等を流罪せられ、牢に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出さる。是等の大難には、龍樹天台傳敎も、爭てか及び給ふ可き。されば如說修行の法華經の行者には、三類の强敵打ち定て有る可しと知り給へ。されば釋迦御入滅の後、二千餘年が間、



如說修行の行者は、釋迦天台傳敎の三人はさておき候ひぬ、末法に入ては日蓮並に弟子檀那等是れ也。我等を如說修行の行者と云はずば、釋迦天台傳敎の三人も如說修行の人なる可からず。（中略）

今日本國の萬人、日蓮並に弟子檀那等が三類の强敵に責められ、大苦に値ふを見て、悅むて笑ふとも、今日は人の上、明日は身の上なれば、日蓮並に弟子檀那共に、稻露の命の日影を待つ計りぞかし。只だ今佛果に協ひ、寂光の本土に居住して、自受法樂せむ時、汝等が阿鼻大城の底に沈み、大苦に値はむ時、我等何か計り無懺に思はむずらむ、汝等何か計り羨ましく思はむずらむ。一期を過ぐること程なし、何に强敵重なるとも、努々退く心無く、恐るゝ心無かれ。頸をば鋸にて引切り、胴をば鞦鉾もて突き、足には錠を打て錐を以て捫むとも、命の通はむほどは（中略）

此文の末尾には、此書不離御身常可有御覽候、の十二字を附せり。

我は我身の君主なりとは希臘の神の吾人に語る所也、帝王たりとも遂に如何ともする無けむ。日蓮が眼中に、平和なし、靜謐なし、波瀾あり、怒濤存す。彼が是認する所は、親鸞に非らざる也、法然にあらざる也、クリストに非らざる也、マホメット也、クロムウエル也、ルーテル也、釋迦也、天台也、傳敎也、而して日蓮彼れ自身也。此等の人々は法華經の行者にして而かも大難に値ひ給へり、此等の人々を如說修行の人と云はずむば、何れにか如說修行の人を尋ねむ、とは日蓮が叫べる聲に非らずや。末法に入つては日蓮が獨占舞臺也、我等を如說修行の行者と云はずむば釋迦天台傳敎の三人も、如說修行の人なる可からずとは、亦た是れ彼が下せる一大宣言に非らずや。

顧みて末法の日本國や如何。鬪爭堅固、白法隱沒して國土に惡鬼亂れ、强盛跋扈するもの悉く是れ惡王惡臣惡民ならざるは莫し。一代の思潮、濁り盡して、三災七難、旺に起り、邪法邪師紫衣を縈ふて天下を横行す。斯くの如きは白法



の敵に非らずや、法華經の敵に非らずや、新眞理の敵に非らずや、釋迦天台傳敎の敵に非らずや。而して是れ佛敎を蒙りて新樂園を開招す可く天降したる日蓮に在て、正に是れ大々的の敵に非らずや。

日蓮は之と鬪ふ可く、戰の神と化したりき。春潮一度惡風の襲ふ所となつて怒濤沫を生せむとす、漁夫等は惡風惡濤と戰爭を開始せざる可からざる也、檣は折れ、舟板は破れ、楫は壞れる迄。日蓮が衣は裂けたり日蓮が身は破れたり、血は衣を染め盡して、兩度の流罪、彼は今塚原は落葉深き死人の屍の上に、衣手寒く一卷の經文を繙ける也。彼に此煩悶を寫す可き一枚の紙なし、筆なし、身皮を以て紙とし骨を以て筆と爲す、誰か此敗軍の英雄僧を悲しまざらむや。

然かも、日蓮は如上の惡運命に迫害さるゝを以て、寧ろ本懷なりとなしたりき、戰はざるは如說修行の行者に非らずと爲したりき、例へばマホメットが神の宗敎の爲に戰はずむば審判の日に地獄に赴かむ炎天熱しと云へども地獄の火は尙

熱しと云へりき如からずや。斯かる大膽なる宣言の發布は、末法濁世に於て、何人も敢行し得ざる所。所謂日蓮主義は、日蓮を除て他に何人も敢て發揮し得る所に非らざる可し。

日蓮、之れと前後して世に著したる諸法實相鈔中に、大聲して云く、

斯くの如き法門を、日蓮除きては申し出す人、一人もある可からず。天台傳敎等は心には知り給へども、言には出し給ふまでになし。夫も理り也、付屬なき故に、時の未だ至らざる故に、佛の久遠の弟子のあらざる故に。爾り、万衆の戰慄す可き魔王主義を臆面なく發揮して、自己の歴史に血を染むるもの、日蓮を除きて、他に何人かありなむ。同しき血脈に連なれる天台傳敎等の、之を云爲なさゞりしは、時の未だ到らざりしが爲めなりとなせり。佛法は時に從て、撓受折伏す可きもの也、天台傳敎の時代には未だ折伏主義を皷吹する迄に、濁らざりけむ。日蓮が時代に在ては、國土に惡鬼亂れて、怒濤沫立



てり、魔王主義の傳道は、一代の惡時潮に反抗して起らざる可らず。

五月十七日、最蓮房に與えし書の末尾には、

日蓮は泣かねども涙ひま無し(中略)。此文には日蓮が大事の法門共、書て候ぞ、能々見ほどかせ給ふ可し。一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給ふ可し。相構て相構て、信心つよく候て、三佛の守護を被らせ給ふ可し。行學の二道を勵み候ふ可し。行學絶えなば、佛法は有る可からず。我も致し人をも敎化候へ。行學は信心より起るべく候。力あらば、一文一句なりとも語らせ給ふ可し。

とあり。其威權ありて、他を壓迫せむとするの樂、言々句々の間に進れるを見る可し。

惡氣運は天下に滂礴して、彼が一大預言を下したる他國侵害の兆は、愈々迫り來らむとす。佐渡にあるの日蓮は、沈默を守るに忍びず、更に立正安國論の主

張を繰返して歇まざりき。其聲は大なる響を爲して直に鎌倉を驚かせり。

十二月七日、鎌倉より佐渡の守護に狀あり。云く、

自相摸佐渡國への流人の僧日蓮、引率弟子等巧惡行之由、有其聞、所行之企甚以奇怪也、自今以後、於相從彼僧之輩者可令加炳誡、猶以令違犯者、可被註進交名之由候也、仍執達如件。

文永十年十二月七日

津々は之が爲めに關を設けられ、浦々は之が爲めに嚴しく戒しめられたり。

日蓮、仍ち記して云く、

恐くば天台傳敎も未だ此難に値はず。當に三人に日蓮を入れて、法華經の行者四人となる可し。法華經の行者末法に在る歟。喜しい哉、況滅度後の記文に當れり。悲しい哉、國中の諸人、現在には身を亡し、死して阿鼻獄に入らむ。茂を厭て之を委細に記さず。心を以て之を推せよ。



と。其他佐渡流罪中に於ける彼の著書、甚だ多しと云へども、其所謂日蓮主義なるものを發揚せる文字に至ては、如上摘記し來りしものと大同小異なれば、敢て繁に流れざる可き歟。

千光山淸澄寺の法壇に於て、念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の一大宣言を發し、狂人の狂語なりとして放逐されしより以降、佐渡流罪に到る間、殆むど二十五年に亘るの長日月は、彼の歷史が各ページ毎に血赤色に染まされ行きし時代にして、又た彼が把持する戰爭主義の最も猛烈に發揚され恰かも燎原の火の如くに惡國土を燒盡せすむは歇まざるの槪ありし時代也。惡遺傳的血液の循環せる彼が血脈の最高潮の熱を帶びて、怒濤洙立つ荒暴海上に、帝王の主權を握せむと欲せしの時代也。佛敎を蔑て天降せし彼が、神秘に附せられたる鍵を以て、大樂園を開拓す可く、折伏主義を傳道したるの時代也。或は惡國と戰ひ、惡王と戰ひ、惡臣と戰ひ、惡民と戰ひ、殿中に戰ひ、辻に戰ひ、斯くて以て一代の

惡時潮に反抗したりきの時代也。

而して此光榮ある歴史も、今は漸く盡きなむとして、同文永十一年二月十四日、彼は、死人が伏せる屍の上の塚原の、破れたる堂宇を脱し得るの身となる自由を得たり。

時の赦免狀に云く、

日蓮法師御勘氣の事、所被免許候也

文永十一年貳月十四日

行　秉　在判
清　長　在判
行　平　在判
光　綱　在判

藤左衛門入道殿



鎌倉よりの赦免狀は、落葉繁き日蓮が破堂を見舞ひて、彼は翌月十三日に塚原を出て、斯くて仝月二十六日、事無く鎌倉の地に入るを得たる也。

佐渡流罪の前後に亘りて、彼が當時の有樣を記せる文あり。星下書と號す、亟複を厭はず二三を摘錄しなむ。

追狀に云ふ、此人は咎なき人也、今暫くありて許させ給ふ可し、悞ちしては後悔ある可し。云云

其夜は十三日、兵士共數十人坊の邊り並に大庭になみ居て候、九月十三日の夜なれば月大に晴れてありしに、夜中に庭に立出て月に向ひ奉て自我偈少々よみ奉り、諸宗の勝劣法華經の文、あら〳〵申て、抑も今の月天は法華經の御座に列りまします名月天子ぞかし。寶塔品にしては佛敕を受け給ふ、囑累品にしては佛に頂をなでられまゐらせ、如世尊敕當貝奉行と誓狀をたてし人ぞかし。佛前の誓ひなれば日蓮なくば虛くてこそはす可けれ、

今かゝる事出來せば、急き悅をなして法華經の行者にかはり佛敕をも渡して誓言のしるしをもとゞけさせ給ふ可し。如何に今しるしの無きは不思議に候ものかな、如何なる事も國になくしては、鎌倉へもかへらむとも思はず、しるしこそ無くとも嬉し顏にて澄渡らせ給はゞ如何に。大集經には日月明を現はすと書かれ、仁王經には日月度を失ふと書かれ、最勝王經には三十三天各瞋恨を生ずとこそ見え侍るに、如何に〳〵月天々々と責めしかば、其驗にや、天より明星の如くなる大星を前の梅の木の枝にかゝりてありしかば、武夫共皆な椽より飛び下り、或は大庭にひれ伏し或は家の後ろに逃げぬ。頓て即天かき曇て大風吹き來て、榎の島の鳴るとて空ひゞく事大なる鼓を打つが如し。夜明くれば十四日卯時に本間十郎入道と申すもの來て云ふ、昨夜の戌の時計に守殿に大なる御騷ぎあり、陰陽師を召て御占ひ候へば、申す、大に國亂れ候ふ可し此御房御勘氣の故也、急き〳〵召返さず



ば世の中如何候べかるらんと申せば許させ給て候と申す人もあり（中略）此間鎌倉に或は火を放つ事七八度、或は人を召すこと隙なし。讒言の者の云ふ、日蓮が弟子共の火を放つ也と、さも有らむとて日蓮が弟子等を鎌倉に置く可からずとて二百六十餘人に知れざるを皆な遠國に遣はす可し、牢にある弟子をは頸を刎ねらる可し、と聞ゆ。さる程に火を放つ者は持齊念佛者が計り事也。其餘はしげゝればかゝらず、同十月十日に依智を立て同十月二十八日に佐渡國へ着きぬ。十一月一日に六郎左衛門が家の後ろ、塚原と申す山野の中に洛陽の蓮臺野の樣に死人を捨つる所に一間四面なる堂の佛も無く上はふかず四壁はあらはに雪降り積りて消るゝ事なし。斯かる所に敷皮打しき簑打ち着て夜を徹かし日を暮らす、夜は雷電ひまなし、晝は日の光もさゝせ給はず、心細かる可き住る也。

嗟呼、是れマカメツトがコレーイシュ族の追害に接してサール山中に放追され

し現狀に似たらずや。着するに衣類無く、電光閃く所、夜の雨髑髏に聲を發し、亡魂は草叢に囁ける也。

斯くて過ぐる程に、庭には雪積りて、人通はず、堂には荒き風より外は便づれず、眼には止觀法華を晒し、口には南無妙法蓮華經と唱へ、夜は月星に向ひ、昼は日に向ひ奉て諸宗の違同と法華經の深義を談する程に、年かへりぬ。何處も人の心の果敢なさは、佐渡の國の持齊念佛者の唯阿彌陀佛生喰房慈道房等の數百人より僉議すると承る。

則ち日蓮を暗殺せむとするもの也。日蓮は尙記して云く、

阿彌陀佛の大怨敵、一切衆生の惡智識の日蓮房、此國に流されたり。何と無く此國へ流されたる人の始終活けらるゝ事無し、活けらるゝとも歸へる事なし、又打殺したりとも御咎め無し。塚原と云ふ所に只だ一人あり、如何にカウナリとも強くとも、人無き處なれば集て射殺せかせと云ふものもあ



りけり。

是れ頓て塚原に於ける諸宗問答となりしもの也。然れども敎理を闘はす上に、百千の僧侶は不幸にして一日蓮の强敵にあらず。直に折伏せられて、

或は惡口し、或は口を閉ち、或は色を失ひ、或は念佛ひが事

するのみなりき。夫より、

去年の十一月より勘へたる開目抄と申す文二卷造りたり、

と記せり。開目抄に就ては、既に業に摘錄し盡したる所、茲には畧す可し。日蓮は此星下書中に於ても、開目抄並に安國論の主張を演釋し、遂に左の如くに記したり。

相摸國守殿等の用ゐざらむには、日本國の人用ゐまじ、用ゐずば國必らず亡ぶ可し。日蓮は幼若なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし。値かの天照太神正八幡なむど申すは、此國には重けれども、梵釋日月四天に

對すれば、小神ぞかし。

日蓮は法華經の行者にして、釋迦の御使ぞかしと云ふ、是れ恰もマホメットが自から神の預言者なりと呼唱せしに似たり。而して天照太神正八幡を冷視して、更らに人類の崇拜す可き偉大なる神の、日月四天に耀けるを示し、是と月との其間に、麗はしき花の咲ける樂土あるを語り、此花園は正に、彼が掌中にある天國の鍵を以て開放さる可きものとし、天國の花園の麗はしき花の不斷の香に醉臥せむを欲するものは彼に乞ふて其鍵の恩澤に預からざる可からずと爲す所殆むどマホメットがイスラムを說くが如きものあり。

文永十一年二月十四日、御赦免の狀、仝三月八日に着かぬ。

三月十二日に島を出て、仝三月二十六日に鎌倉へ打入りぬ。

是れ彼が此文の末に記せる所。彼れ今や、其規絆を擺脫して、鎌倉に入る自由の身とはなりぬ。折伏主義のライヲンたる彼が血赤色の歷史も今や盡なむとす、



彼、鎌倉に入て抑も如何せむとするや。抑も駱駝に跨りアブベーカーを從へ、コペの都に入りて辻の傳道を試みたるマホメットの最終の如からむとする歟。寒國の山中に瘠せたる英雄僧の次のペーヂや、奈何。

# 第六編　山林に遁れたる英雄僧日蓮

威權と壓力と意氣と、此三者を持して、怒濤沫立つ思想の海に、一大新版圖を樹立し、折伏主義の旗を飜して無限の號令を爲す可く血を濺ぎたる一代の英雄僧日蓮、北國の木枯に瘠せて再び鎌倉府下の法壇に起つも、彼が口を發して說かゝる、新眞理や、惡國惡民の悅ぶ所に非らず、又た彼が偉彩を放てる瞳眼に由つて下されたる一大預言や、惡王惡臣の用ゐる所にあらず。嗚呼止まむぬるかな、我言を用ゐずむば日本國亡ぶ可しの一語を殘し、彼は山林に隱遁す可く、文永十一年五月十二日、鎌倉を出て、酒勾に宿り、竹下車友大宮波木井の鄕を經て、六月十七日身延の山に岐け入り、世外の風雲に嘯くの外なかりしに非らずや。七面山、鷹取山、白嶺々嶽、嶺又峯巒うること高くして、日蓮が聲は直に天上



に響き渡る、今や樂園の戸は開放せられて、また一人の彼を誹謗すゝ聲達せず。雲は靜かに過ぎ、月は明かに照り渡る。

山中より佐渡なる千日尼御前の許に送りたる書あり。中に云く、

單衣一、種々の物、佐渡より甲斐の國木井鄕の內の深山まで送り給ひ候ひ畢はむ。（中略）

日蓮程、佛法によつて普く世に怨まれたる者は候はじ。守屋が寺塔を燒き、淸盛入道が東大寺興福寺を失し、彼等が一類も此程には仇まれず。（中略）されば或時は數百人に罵しられ、或時は數千人に取り圍まれ、刀杖の難に逢ひ、處々を追はれ、結局は國主より御勘氣二度也。一度は伊豆國、今度は佐渡國の國嶋也。されば身命を續べき樣もなし、身を隱す可き藤の衣も持たず、北海の嶋に放たれしかば、彼國の道俗は相州の男女よりも怨をなして野中に捨られて雲に肌をまぢへ、草を摘みて命を差ゐたりき。（中略）

而るに尼御前並に入道殿は、彼國に有りし時は人目を恐れて、夜中に食を送り、或時には國の責をも計らず、身にもかはらむとせし人也。左れば辛かりし國なれども、常に思出され候也。何なる過去の契にやありけんと覺束なく候つるに、指したる大事も無きに、是まで使を遣はされて候事、夢歟まぼろし歟、尼御前の姿をば見參らせ候はねども、心をば是にて留め置き候、日蓮を戀しく御坐し候ば、日月を拜ませ給ふ可し。何時なく日月に影を浮ぶる身なれば也。（下略）

と。一切の女人、彼を怨み、彼を呪ひつる國土に、千日尼獨り身を抽て、法華經の行者を待つ。日蓮は目して以て、呂后の沛公に於けるが如しと云ひたり。

光日房御書中には記して曰く、

去文永八年九月の比より御勘氣を蒙て、北國之海中佐渡の島に放されたりしかば何となく相州鎌倉に住せし時には生國安房國は戀しかりしかども我



國ながら、人の意も何とやらむ睨ひ惡しくありしかば、常に行き通ふことも無くして過ぎしに、御勘氣の身と成て死罪と成る可かりしが、且く國の外に放たるゝ上は、ねぼろげならでは鎌倉へは還らる可からず、歸らずば又父母の墓所を見る身とも成りがたからむ思ひありしかば、今更ら飛ひ立つ計り悔て、などかゝる身とならざりし時、日にも月にも、海を渡り山を越て、父母の墓をも見、師匠の有樣をも問ひおとづれざりけむと歎かしくして（中略）

文永十一年二月十四日の御赦免狀、仝三月八日に佐渡國に付す。仝十三日に國を立て、マウラと云ふ津に下り（中略）三月二十六日に鎌倉に入りぬ（中略）同き五月十二日に鎌倉を出てぬ。但し本國に至て今一度父母の墓をも見むと思へども、錦を着して故郷へは還れと云ふ事、內外の掟也。指せる面目も無くして本國に到りなば、不幸の者にてや有らんずらむ。是れ程の難つ

かりし事だにも破れて鎌倉へ還入る身なれば、又錦を著る篇もあらんずらん。其時は父母の墓をも見よかしと深く思ひし故に、今に本國へは到らねども、道が戀しくて吹風立つ雲までも、東の方と申せば、巷を出て身に觸れ、庭に立て見る也。斯かる事なれば故郷の人は設ひ心よせに思はぬ者なれども、我國人と云へば懐かしく（中略）。

故郷忘じ難しとは、如何なる英雄にあつても均しかるらむ。功成り名遂げ、若くは他郷に不過轗軻の其熟れたるを問はず、雨の夜風の朝、胸裡に來往するは、故郷の事共に非らずや。彼、日蓮、彼は天授の佛敕を世に示し、八万四千の法門裡より發見し來つたる一大新眞理を皷吹し傳道なさむ爲めには父を捨て母を捨て、血緣の總てを捨てゝ毫も悔うる所に非らざりき、法華經の行者たらむものは此等を顧みざれとは、彼が叫べる聲也、且つ夫れ彼が故郷は最も彼に對して冷酷なりき、彼をして一個の足痕だも印さしめ得ざる迄に酷薄なりき、彼が



十數年間の苦行研學を以てして發見したる一大新眞と一大折伏主義とが、彼に依つて始めて傳道さるゝの大光榮を擔ひしも彼の千光山清澄寺なれば、此一大偉人を目するに狂語を操る狂人なりと宣言して之を清澄寺の光榮ある法壇より敢て彈劾し去り放逐し去りたるもの、亦た是れ彼の清澄寺也。惡遺傳の片身を世に殘して辭し去つたる彼が父母の墓は、今や倒るゝ儘に倒れ、今や雨降る儘に苔蒸し人は其碑に鞭ち罵り唾せずむば已まず、預言者故郷に容れられずとは東西兩大洋を通して立證さるゝ天降の聲ながら、亡き父母の靈斯くの如くに安憩し得ずして、日蓮如何か、故郷を恨まざらむや。彼が前途には怒濤皆な沫立てり、彼は新版圖に無限の號令を爲す可く、狂はざる可からざる也。父母を懐ひ、故郷を思ふと勢ひ薄からざるを得ず。吁然れども今や日蓮、三度び國王を諫めて用ゐられず、靜かに白雲深き森山に身を遁る、此時に當て、亡き父母を懐ひ、冷酷なりし故郷を懐しむを禁じ得ざりしもの寧ろ人生自然の情ならず

とせむや。

日蓮、次いて、此の山の峰高く谿深うして、人跡絶えたる無人の境なるを記して云く、

此山の體たらくは、西は七面の山、東は天子の獄、北は身延山、南は瀧取の山、四の山高さこと天に付り、險しきこと飛鳥も飛び難し。中に四の河あり、所謂富士河、大白河、身延河、早河也。其中に一町ばかり間の候に、庵室を結て候。晝は日を見ず、夜は月を拜せず、冬は雪深く、夏は草茂り、訪ふ人稀れなれば、道を踏み岐くること難し。殊に今年は雪深く、人訪ふこと無し。

と。日蓮が世を遁れて、隱れ居るは此かる深山の奥也。

鎌倉なる弟子富木氏に與えし書中にも云く、

驚目一貫文厚綿の白小袖一筆十管墨五挺給ひ候ひ畢はむぬ。身延山は知食すが如く、冬は嵐激しく、雪降り積て、消えず、極寒の處にて候間、晝夜の行法も肌薄みにては堪え難く、辛苦にて候ふに、此小袖を著ては、思ある可からざる也。昔商那和修は付法藏の第三の聖人也、此因位を佛說と云ふ、乃往過去に病の比丘に衣を與し故に生々世々に不思議自在の衣を得たり。今の小袖彼を以て此を思ふ、此功德は日蓮は之を知る可からず。併て釋迦佛に任じ奉り畢はむぬ。

と。嵐激しく雪降り積れる身延山中の開山、筆墨小袖の類は、大概弟子檀那より供せしが如かり。

又た四條金吾氏に與えし書中にも、

鷹取の獄、身延の獄、なゝいたかれの獄飯谷と申すに、木の本茅の本、岩の上土の上、何かに尋ね候へども、をひて候處なし云云。

とあり。

斯かる世外の風雲に閑日月を送りし日蓮も、時には惡鬼亂るゝ國土の前途を見棄るに忍びざるものありしが如し。身は身延山の山深く岐け入りながら、他難侵迫の事に接しては、奈何ぞ彼れ山林僧たるに堪え得むや。

弘安に入つてより、遂に彼が發せし一大預言は、愈々事實と成て現はれ來りぬ。七難の內の五難早く現はれて二難今來らむとし、三災の內の二災既に國土を犯して殘る一災頓て來襲せむとす。今にして邪法邪師を却け、一切の權門權教を除去し盡すに非らずむば、國遂に亡ふべし、今にして法華經の行者を迎え新眞理の光明に溶するに非らずむば、島帝國土遂に他の犯す處たらむとは、彼が聲を枯らして繰返したるの一大預言にして卷ては念佛無間禪天魔の四大宣言となり舒ては安國論幾千万言の大文字となり以て彼が生涯を血赤色に染め了りたる所の者に非らずや、彼が生命の存する所は是れ也、彼をして六十一年間の悲慘なる歷史を作らしめ所以のものも是れ也、彼が折伏主義の本源たり根本たる所



のもの亦即ち是れ也。而して今や、此一大預言は、現實となり來むとす、英雄僧日蓮が得意、想ふ可からずや。彼が聲言は復たしても、破鐘の如き響きを爲して、身延山中より日本國中の人心の根底に滲き渡りぬ。弘安前後になりし、彼が自筆の文字は記して云く、

壹岐對馬九國の兵器、並に男女多く、或は殺され、或は捕られ、或は海に入り、或は崖より落ち、幾千と云ふことなし。又今度寄せなば先には似る可くもある可からず、京と鎌倉とは但壹岐對馬の如くなる可し。爾時は書し日蓮を不見不知申せし人々も、掌を合せて法華經を信す可し。（乙御前に與えし書中の一節）

檀彌羅王と申せし惡王は、月子の僧の頸を切り失し也。然れども師子尊者の頸を切りし時、刀と手と共に一時に落ちにき、弗沙羅王は雞頭摩寺を燒きし時、十二神の棒に頭破れにき。今日本國の人々は、法華經の敵となし

りて、身を亡したる也。斯く申せば、日蓮が自讃也と心得ぬ人は申す也。左にはあらず、之を云はずば法華經の行者には非らず。（上全）

法華經を持つ人は一切世間の天人の眼也と說れて候。日本國の人の日蓮を怨み候は一切世間天人の眼を抉る也。されば天も瞋り日日に天變あり、地も怒り月々に地天重なる。（上全）

今、日蓮愚かなりと云へども野干と鬼とに劣る可からず、當世の人いみじくとも帝釋雪山童子に勝る可からず、日蓮が身の賤きについて、巧言を捨てゝ候故に、國既に亡びむとする悲しさよ。（上全）

他難侵逼の事は、日蓮が救世第一の事業として之を預言し以て世を誡しめき所也。然かも時到らずして遂に用ゐられず、今や他難の來襲、斯くの如し、日蓮が叫ぶ聲は、益々大とならざるを得ず。

後五百歲には誰人を以て法華經の行者と之を知る可き。予は未だ我が智慧



を知らず、然りと云へども自他の叛逆侵逼之を以て我智慧を信ず。日蓮は是れ法華經の行者也。今、日蓮を毀呰する事は、但し一人二人に限る可からず、日本國一同に破る也。所謂正嘉の大地震、文永の長星は誰か故ぞ。日蓮は一閻浮提第一の聖人也。上は一人より下萬民に至るまで、之を輕毀す、刀杖を加へ流罪に處する故に、梵天帝釋日月四天等隣國に仰付て、之を逼責する也。（聖人三世事）

設ひ萬物を作るも、日蓮を用ゐずむば、必らず此國壹岐對馬の如くならむ。我弟子仰て之を見よ、是れ偏に日蓮が尊貴に非らず、法華經の御力の殊勝なるに依て也。身を舉れば、慢すると想へども、身を下せば、經を蔑る、松高ければ、藤長し、源深ければ、流遠し。幸なる哉、憑しき哉、穢土に於て喜樂を受けむは、但日蓮一人而已。（上全）

夫れ日蓮は法華經の行者也、一閻浮提第一の聖人也、之を迫害するの故を以て

、天神地祇は瞋忿し、或は星を下し、或は井水を涸らし、而して隣國をして此惡國土を犯さしむるものなりと云ふ、其意氣の、何ぞ夫れ强猛なるや。更らに、萬物を作るも日蓮を用ゐずむば必らず此國亡ぶ可しと叫ぶに到ては、其强さこと幾許なるを側知す可からざるの槩あり。

末法に成り候へば人の貪欲漸く過ぎ候て王と臣と子と弟と諍論隙無く增して、他人は申すに及ばず、之に依て天も其國を捨れば、三災七難乃至一二三四五六七の日出て、草木枯れ失せ、小河大河も盡き大地は炭の如く成り、大海は油の如く成り、結局は無間地獄より炎出て梵天まで上り、火災充滿す可し。

之れ亦た、末法濁世の日本國を熱罵せるの文字也。

異體同心事中にも彼れ記して云く、

辨の阿闍梨が使は餘り忿々にて書き得ず候ひき。さては冬の年の比、如何



かと覺しつる蒙古國の事、既に近付て候歟。我國の亡びん事はあさましけれども、是れだにも空ごとになるならば、日本國の人々彌々法華經を謗して、萬人萬限地獄に墮つ可し。

日蓮は法華經の御使、日本國の人々は大族王の一閻浮提の佛法を失ひしが如し。蒙古國は雪山下王の如し。天の御使として法華經の行者を怨む人々を罰せらる可し。

本尊問答抄中にも記して曰く、

漢土にも知る人無く、日本にも怪ゝめずして既に四百餘年の星霜を送れり。此の如く佛法邪正亂れしかば、王法も漸く盡きぬ。結局は此國他國に破られて亡國と成べき也。此事日蓮獨り勘へ知る故に、佛法の爲め王法の爲め諸經の要文を集て一卷の書を造る。仍て故最明寺の入道殿に奉る、立正安國論と名く、其書に委く申したれども、愚人は知り難し。（中略）今他國の責を蒙

り候て、此國既に滅びむとす（中略）

一谷入道に與えし書中にも、

日蓮が申す事は、愚なる者の申す事なれば用ゐず、然れども去文永十一年十月に蒙古國より筑紫に寄せて。（中略）是れ梵天帝釋日月四天の彼蒙古國の大王の身に入らせ給ふて責め給ふ也。日蓮は愚かなれども釋迦の御使、法華經の行者なりと名乘候を用ゐざらん爲めにも不思議なる可し、其國破れなむ。（中略）又た今際に臨みて日蓮が弟子と名乘るとも、日蓮が判を持せざらむものを御用ゐある可からず。

如上の文字は、幾十通の彼が著作の其各ページ毎に活躍せる也。彼が預言は、現實となりて文永十一年より逐年、遂に弘安の一大修羅場を出現す。法華新宗教の旅を醜へす可きは此時也。然かも彼は遂に、森山雲深き處より其身を現さざりき。



然り其身を現はさゞりしと云へども、天下は翕然として、彼の預言に耳を傾け、彼が語らむと欲する所を聽氣ながらも窺知せむとするの氣運を萌し來つたる也。而して彼、今や自己が開拓したる新天地の樂園に、永遠の眠を貪る可く、浮世の旅を急ぎつゝあり。噫、之を是れ奈何せむや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾人、今、此一大英雄僧が示寂を記す前に當て、猶ほ聊か、彼が後世に遺せる自筆の文中の、信ず可きものに由りて、山林に遁れたる英雄僧の片影を見なむ。

身延山が、當時如何かばり恐ろしき大蛇並に天狗乃至は山神の住み家として世に慴恐を與へ居たりしかは、其の春は雲深く閉じて鳥も啼かず、夏は怪木繁りて空を掩ひ、秋は霧濃くして天日薄らかなるにても知らる可し。此深山に草庵を結ひ、世を遁れたる英雄僧日蓮が如何に生活し呼吸したりしやは本文の冒頭にも描き置きし所なるが、猶ほ彼が此草庵に於て執筆せし『身延山抄』中に

は記して云く、

誠に身延山の栖は、百早振る神も惠みを垂れ天さがりまします心無く、賤の男、賤の女も、心を留めん可し。衰を催ほす秋の暮には草の庵に露繁く、檜にすだく蛩の糸玉を連き、峰の紅葉の何時しか色深うして、絶え〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にし負ふ立田河の水上も斯くやと疑はれぬ。又後ろには峨々たる深山聳ゑて梢に一葉の果を結び、下枝に鳴蟬の音澁く、前には湯々たる流水湛えて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴て、法性の空に雲もなし。斯かる砌りなれば庵の内には、豈は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜、要文誦持の聲のみす。傳聞く、釋尊の住み給ける鷲峯山を我朝此砌りに移し置ぬ。霧立ち、嵐激しき折々も、山に入て薪を折り、露深き草を岐て深谷に下り、芹を摘み、山河の流も早き岩瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干しわぶる思は、昔の入丸が詠ける和歌の浦に藻



鹽垂れつゝ世を渡りし海士も斯くやと思ひ遣る。

怒濤洙立つ思想の海に、大風と戰ひ暴雨と鬪ひ、幾百の矢疵を帶びて今は山中深く浮世を捨てたる一大英雄僧が老後の生活、眞に英雄頭を回らせば是れ神仙の感浮かばすや。老杉怪樹の雲に聳えたる深山の奥に、老雄が生涯しつゝある天下自然の美景想ふ可き也。

たち亘たる身の浮雲も霽れぬ可し
たえぬ御法の鷲の山風

とは、彼が此書の末尾に記せるの和歌也。

猶ほ此書中、貧女の一燈を說ける條あり、

（上略）祇園精舍へ七月十五日の夜、佛入らせ給ふべき由有りしかば、梵天帝釋忉利天より金銀水精の三の橋をかけたりける。中の橋を佛は入らせ給ひき。佛の左には梵天、右には帝釋、互に天蓋を指しかけ進ぬらせ、佛の御

後には四衆八部迦葉迦旃延目蓮菩提千二百の羅漢萬二千の聲聞八萬の菩薩等を引具して下り給ひけるに、五天竺に有りと在る人皆なタエ々々に隨て油を儲て燈けり。萬燈を點す人もあり、千燈百燈乃至一燈をともす人もありけるに、貧女と云ふ者ありけり、貧しき事譬ふ可き方もなし。身に纏ふ物とてはトフノスカコモにも及ばず、藤の衣ばかり也。四方に馳走すれども一燈の代を求るに能はず、空しく歎き思ひつもれる涙油ならましかば、百千萬燈に點すとも盡きず。思ひの餘り自から髪を切り手づからかづらにひねりて油一燈にかへて纔かにぞ燈たりける。佛神も三寶も天神も地神も納受を垂れ給けるにや、藍風毗藍風と云ふ大風吹て、燈の吹き消けるに、貧女が一燈計り殘りたりける。此光にて佛は祇園精舎へ入らせ給ひけり。正に是れ大なる詩編也。

また、某女より單衣を送りしに謝して書ける文中には、



單衣一送り給ひ候ひ畢はひぬ。棄老國には老者を捨て、日本國には今法華經を捨つ。

と冒頭を置きて、

蘇武が如くに雪を食として命を繼ぎ、李陵が如く簑を著て世を過す、山林に交て菓なき時は、空にして兩三日、麻の衣破れぬれば裸にして三四日也、斯かるものをば何とかして哀れと思しけむ。未だ見參せざるにも、人の膚を隱す衣を送り給ひて候こそ、何にとも存じ難く候へ。此帷を著て佛前に詣で、法華經を讀み奉れば、御經の文字は六萬九千三百八十四字、一々の文字は皆な金色の佛也、衣は一なれども六萬九千三百八十四佛に一々に著せ進し給へる也。

と云へり。又四條金吾に送りし書中には、

御文、粗承て、長き夜の明け、遠道を還りたるが如し。夫れ佛法と申すは、

勝負を先と爲し、王法と申すは、賞罰を本と爲す。故に佛をば世雄と號し、王をば自在と名く。中にも天竺をは月支と云ひ、我國を日本と申す。一閻浮提八萬の國の中に大なる國は天竺、小なる國は日本也。名の目出度さは印度第二、扶桑第一也。佛法は月の國に始て、日の國に留る可し。月は西より出て東に向ひ、日は東より西へ行く事、天然の理。云々

趣味ある語なりと云ふ可し。

日蓮、身延山を下る滿壹年前、弘安四年九月十一日の書に彼れ記して云く、

此處は人倫離れたる山中也、東西南北を去て里も無し。斯かる最と心細き幽谷なれども、教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳へ、日蓮が肉團の胸中に秘して隱し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也。舌の上は轉輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌りなる可し。斯かる不思議なる法華經の行者の住處なれば、爭か靈山淨土に劣る可き。法妙なるが



故に人貴し、人貴きが故に所貴しと申すは是れ也。

ヘエラの山はマホメットに由りて貴し荒野の子たる彼が靜坐默考の末、直に宇宙の偉大なる思想に觸接し其折伏主義の下に我は神の預言者なりと始て叫びし所、是れヘエラの山に非らずや。此一大英雄によつて無名の深山、名著はるゝこと幾許。夫れ法華經の行者たる日蓮が世外の草庵を結ひたるは身延の深山也、其名今日に著はるゝもの彼日蓮が爲めならずとせむや、彼は之を公言して憚からざる迄の大膽と信念とを持したり。

女性に對して日蓮が說きし所は、甚だ些少なりき。女人成佛の一節の外は、餘りに信々せざりしが如し。想ふに彼が周圍を繞つて打ち寄する怒濤の餘り荒き爲めに、之に向て反抗を繼續なす可く、他に力を盡す餘地の尠かりしにも因りしなる可し。

否な、彼が主張し標榜する所は、折伏主義也、戰爭主義也、其思想海に飜へせ

る旗は恒に血赤色也。女性に說かむには、餘りに强よかりき、餘りに狂暴なりき。

然れども、尙女性に關して云爲せる所、二三無きには非らず。

某女房に與えし書中に、

柳の靑裏の小袖、綿十兩に及候歟。此大地に二の地獄あり、一には熱地獄、炭を起し野に火を付たるが如く、燒亡の火鉄の湯の如し、罪人の燒るゝ事は、大火に紙を投け、大火に枯れ草を投くるが如し。此地獄へはヤキトリと火を懸けて敵を責め、物をねたみて胸を焦かす女人の墮る地獄也。

とあり。マホメットが說ける大熱地獄の夫れに似たり。

また、

此比は女は尼に成て人を化し、男は入道に成て大惡を造る也、努々有る可からざる事也。



と云へり。

こは必らずしも女性に對してのみ惡罵を放ちしものにはあらず。其百八の煩惱より離脫して、身を修め世を說く可き比丘並に比丘尼輩が、一代の惡時潮に感染せるの狀を痛罵せるもの也。例へはマホメットが神の敎に逆き人を誘惑するものは審判の日に地獄に赴かむと云ひしが如く、此に其『人を化し』『大惡を造る』と云へるは必らずしも普通の惡行惡言を咎めたる語にても非らざる可し、寧ろ彼等の總てが新宗敎を敵として權大乘に與みし以て日蓮に抗ずるに憤激して罵りたるの語なる可き歟。昔はシーリーの大詐欺師ペルサモー不老の妙法を授くと稱して金錢を欺取せしことあり、世は彼にカリオストロなる綽名を與へき。今夫れ女は尼と成て人を化し男は入道と成て大惡を造る、是れペルサモーが不老の妙法を授くと稱して金錢を欺取するが如きに非らずや。佛敎の爲めに日蓮憤激せざるを得ず。

其他、女性に關する文字あれど、所詮、女人成佛の法を說けるもの〻以外に脫せざれば、玆に省畧すること〻はなしたり。

＊　＊　＊　＊

斯くて、宗敎史上、日本國民が最も記憶す可き一大紀念日は近まさり來りぬ。紀念日とは何ぞ、極東のルーテルとしてマホメットとして、將た亦タクロムウエルとして、惡代時に反抗す可く、怒濤沫立つ宗敎海に血赤色の旗を飜して號令したる一大英雄僧日蓮が示寂の紀念日也。東洋唯一の折伏主義の皷吹者を其歷史に有せる日本國民に取りては、是れ一大紀念日に非らずや。



# 第七編　碑の下に眠りたる

## 英雄僧日蓮

如何なる英雄も、碑の下に眠り去りては、春風秋雨、默として何事も語らざる可し。然れども、其主張と言說とは、永遠に史上の鏤刻する所となつて、國民は何時にても、彼を思ひ彼を見、而して彼を自由に想像することを得可けむ也。吾人は吾人の能ふだけの想像に於て、且つ、歷史上に鏤刻されたる限りの文字に於て、絕えず彼が如き惡時代反抗の天使に接するの榮譽を有するを悅ぶもの也。而して吾人は、吾人の祖先中に、斯くの如く偉にして高き、折伏主義の皷吹者を有せるを誇らすむば非らざる也。

弘安五年壬午十月十三日辰の刻、如上の熱罵を遺して一代の英雄僧日蓮は、天下の秋を知るてふ一葉と共に、池上に示寂しぬ。

之より前、彼れ身延の山中を出て、池上に到らむとす。下山御消息として今日傳へらるゝ所のものは、則ち其際、日蓮の自筆になれるもの也。

崇峻天皇御書又名同地獄抄は、九月十一日になれるもの也。身延下山を同月八日なりと傳ふるもの、說を異なりとせば、十一日に宿泊したる黑駒に於て、書き記されたるものなる可し。而して彼の池上に着せしは同月十八日、同二十五日には鎌倉より來りし弟子檀那等を召して安國論を講したりとなむ。

遺骨は二十一日池上を發し、二十五日身延山に埋めたり。遺墨の世に存するもの、類百通に餘れり。百四十八色の外は、眞疑判す可からずとなむ。

嗚、一代の英雄僧世を辭し去つて、天下の秋寒し。弘安五年十月十三日は、吾人に在て實に忘却す可からざるの紀念日となりぬ。天下に宗敎家は多し、然れども、日蓮が如くに狂暴に戰ひたる宗敎家は、未だ之れあらざる也。吾人は天下に平和の福音者の、餘りに多きに飽けるもの也、然れども、日蓮が如くに戰



「マホメット之戰爭主義」

爭主義の鼓吹者を以て自から任じたるもの、餘りに尠きを奈何せむ。

戰爭主義を發揮する上に於て、彼は世界の總てのものよりも、最も大膽なりき、其言辭は最も猛烈なりき、其壓迫力は最も强度なりき、而して其意氣は帝王たりと云へども厭迫し得可からざる迄に高潮なりき。之れ既に万人の摸擬し能はざる彼の特點なりし也。

加ふるに、彼に無限の威權あり。苟も彼を犯すものは、先つ必らず無間地獄に落ちざる可からざる也。茲に到て彼れ、日月帝釋の大に達せるに非らずや。而して彼は、惡鬼亂るゝ濁世の惡時潮に反抗す可く、此等の總ての力を、之に向つて濺きたりぬ。其聲は熱を帶び、其筆は血を迸出す。身の皮を紙とし、骨を筆とせむとは、彼が叫けべる聲也。吾人は日蓮を談ずる毎に恒にマホメットを追想せざる能はず。試みにマホメットのコーランを繙け、日蓮が遺文錄に甚だ酷似せずや、而して偶像崇拜の惡酒に泥醉せし當時のアラビヤ種族は、權門

權教に渦仰せる當代の日本國民と一層相類せずや。コレーイシュ族に對て、前後二十三年間奮鬪せしマホメットは、即ち法華折伏の本義の下に二十餘年間極東の天地に熱罵を逞うしたる日蓮の夫れに、毫も異なるを見ず。

イスラムの本義は、神の敎に從へと云ふに在り、マホメットは實にアラビヤ種族の凡てを偶像崇拜の惡醉より覺酷す可く、猛烈なる折伏主義を樹て丶自から手に劍を執てサンディ砂漠に血を染めたり。今日蓮は、權門權敎に惰眠を貪りつゝある日本國民を警鐘せむ爲めに、惡國と戰ひ惡王と鬪ひ、父母の國を罵りて惡臣惡民のみと謂ふ、而して其衣は裂かれ、其身は害はれたり。今夫れ、コーラン紙上に現はれしマホメットの折伏の聲を聞け——汝等よ、神の宗敎の爲めに戰へ、神の宗敎の爲めに戰はざるものは審判の日に地獄に赴かむ、神の宗敎の爲めに戰ふものは死して樂園に赴く、樂園には清き流れあり不斷の花あり其處に美はしく若き妻あり。——汝等よ、神の宗敎の爲めに戰へ、汝に反對するものを殺し汝の宗敎に從はざるものを殺せ、偶像敎徒と結婚する勿れ、彼等にして汝を誘惑せば汝直に彼等を戮殺す可し、神の目には誘惑は戮殺よりも悲しきこと也——と、此等の文字は一度コーランを繙くもの丶見飽く程に觸接する所なる可し。此かる憤激は、コレーイシュ族をして神の宗敎に歸へさむ爲めのものに外ならず、即ち我日蓮が日本國民を權大乘の惡夢よりして法華の實大乘に歸さむとせしものと孰れぞ。法華の爲めに難を蒙るものは幸福也とは、日蓮が其弟子檀那に說き聞かせし所也、而してマホメットも亦た神の宗敎の爲めに戰ふものは死して樂園の鳥となり云々の語をなせり。

若し夫れ日蓮が、父母の國を罵りて惡國惡王と呼び權大乘各宗を毀りて天魔國賊と喚び若くは日蓮を犯すものは無間地獄に墮ちむと言ひしの厭力と威權に到ては、例へば獨逸のルーテルが羅馬法皇の根本敎義を非定して『眇たるサキメニーの一寒僧、我茲に立て汝等の總てよりも强し、汝如何ばかり世界に鳴り響

くも其立てる所は惡魔の上に在り」と彈劾せしにも似たらずや。而して是れ、ホメットがメッカに於てコレーイシュ族を彈劾し『汝等が崇拜せる木像は素徒爾のみ、試みに之に油を點ぜよ、蒼蠅忽ち來て之に粘着するに非らずや。是れ神に非らず、我汝等に告ぐ、是れ黑き一個の木片のみ』と宣言せしに同じ。一代の惡時潮に抗し、一代の文明を批評し、而して一代の人心を覺醒せむと欲せば、此威力と厭力と而して威權莫くむば能はざる可し。

噫、今や一代の英雄僧、一葉と共に散り去りて、天下の秋到る。世に百の平和主義者あるも一の日蓮主義者無きを奈何せむ。筆を投して靜かに顧へば、惡遺傳の血液の最も激昂せる大魔王の、世を慨し、人を罵り、風雷に號令しつゝ一代に大反抗を試みつゝあるを認む。此時、此人、是れ吾人の讃美せる日蓮に非らざる歟。

英雄僧日蓮　完

明治三十八年三月二日印刷
明治三十八年三月五日發行（正價金廿五錢）
東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　大月隆
東京市日本橋區本銀町二ノ十二
印刷者　上野光三
仝　印刷所　光文舍
東京市神田區錦町一丁目十番地
發兌元　文學同志會
（電話本局千〇九十三番）
大阪市江戸堀上通　文學同志會大阪支部

不許複製

# 文學同志會出版圖書目錄

| | |
|---|---|
| 美妙 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人生の氣力 | 定價三十錢 郵稅六錢 |
| 人生の初旅 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人生の老旅 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人生の悔悟 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人生の片影 | 定價二十錢 郵稅二錢 |
| 人生の目的 | 定價廿五錢 郵稅四錢 |
| 人生經濟學 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人物の裏面 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 人生の情事 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 吾人の生活 | 定價廿五錢 郵稅四錢 |
| 山高水長 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 風月萬象 | 定價廿五錢 郵稅四錢 |
| 斷崖絕壁 | 定價三十錢 郵稅四錢 |
| 枕頭の山水 | 定價二十錢 郵稅四錢 |
| 松風吟月 | 定價三十錢 郵稅四錢 |

郊外散策　定價廿五錢　郵稅四錢
悲哀の快觀　定價廿錢　郵稅四錢
萬情萬眉　定價十六錢　郵稅四錢
近世社會主義評論　定價一圓　郵稅十錢
社會研究新論　定價一圓廿錢　郵稅十錢
最近國家社會主義　定價六十錢　郵稅六錢
東洋社會黨　定價五十錢　郵稅六錢
急務檄言　定價三十錢　郵稅六錢
斬奸狀　定價廿五錢　郵稅四錢

精神と力量　定價三十錢　郵稅四錢
虛心談　定價廿五錢　郵稅六錢
活學談　定價三十錢　郵稅四錢
活精神　定價三十錢　郵稅六錢
活禪錄　定價五十錢　郵稅六錢
禪學斷片　定價廿五錢　郵稅四錢
聖僧道元　定價二十錢　郵稅四錢
日本佛教拾二傑傳論　定價三十錢　郵稅四錢
馬琴妙文集　定價二十錢　郵稅四錢



滑稽妙文集　定價三十錢　郵稅六錢
戲曲妙文集　定價二十錢　郵稅四錢
呑氣文集　定價廿五錢　郵稅六錢
高等艶麗文集　定價廿五錢　郵稅四錢
立身の事蹟　定價二十錢　郵稅四錢
研學の順序　定價二十錢　郵稅四錢
青年の將來　定價廿五錢　郵稅四錢
作文指南　定價廿五錢　郵稅六錢
山水記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢

社交記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
高等記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
偉人の膽力　定價廿五錢　郵稅四錢
偉人の生長時代　定價廿二錢　郵稅四錢
頓才の詩人　定價十錢　郵稅二錢
深窓の佳人　定價三拾錢　郵稅六錢
婦人實務錄　定價二十錢　郵稅四錢
女子講本　定價三十錢　郵稅六錢
活戀　定價三十錢　郵稅四錢

戀と死　定價二十錢　郵稅四錢

墳墓の地　定價廿五錢　郵稅八錢

失策の半生涯　定價三十錢　郵稅六錢

成功到着　秘訣　定價廿五錢　郵稅四錢

處世四十八手　昨非錄　定價十二錢　郵稅二錢

天籟萬丈　定價二十錢　郵稅四錢

小文學　定價廿五錢　郵稅四錢

小氣焰　定價廿錢　郵稅四錢

小哲學　定價廿五錢　郵稅四錢

珍本　鴨長明海道記　定價十五錢　郵稅二錢

國史資料　回國雜記　定價二十錢　郵稅四錢

理想の大臣　定價廿五錢　郵稅四錢

禪學の奧義　定價五十錢　郵稅八錢

哲學要領　定價五十錢　郵稅六錢

加賀の千代　定價二十錢　郵稅四錢

成效者の苦學　定價二十錢　郵稅四錢

軍隊の側面　定價二十錢　郵稅四錢

理想の政黨　定價廿錢　郵稅四錢



高等家庭讀本　定價廿錢　郵稅四錢

戀愛の精神　定價廿錢　郵稅六錢

人情の後見　定價廿錢　郵稅六錢

無能の天下　定價廿五錢　郵稅四錢

社會學講義　定價五十錢　郵稅六錢

社會學と哲學　定價六十錢　郵稅十錢

吾家の宗法　定價廿五錢　郵稅四錢

人生の審美　定價廿五錢　郵稅四錢

文學の審美　定價廿五錢　郵稅四錢

自然界の審美　定價廿五錢　郵稅四錢

婦人の情力　定價三十錢　郵稅六錢

戀愛の文豪　定價三十錢　郵稅六錢

弱者の臨終　定價三十錢　郵稅四錢

英雄の片影　定價二十錢　郵稅四錢

心識活談　定價廿五錢　郵稅四錢

詩經新體詩選　定價二十錢　郵稅二錢

詩の神　定價二十錢　郵稅四錢

學生の苦心　定價二十錢　郵稅四錢

心學養性篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道體篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學人間篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道義篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學迷悟篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學性理篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學明德篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學靈性篇　定價廿錢　郵稅四錢
俳流の女神　定價二十錢　郵稅四錢

箴言　定價廿錢　郵稅四錢
高等秀才文集　定價廿二錢　郵稅六錢
奇僧の片影　定價廿五錢　郵稅四錢
高等才媛文集　定價三十錢　郵稅六錢
風彩と審美學　定價三十錢　郵稅六錢
審美學要義　定價三十錢　郵稅六錢
高等美文斷片　定價廿錢　郵稅四錢
女子美文斷片　定價廿五錢　郵稅六錢
心琴　定價二十錢　郵稅四錢



馬琴旅行文集　定價廿錢　郵稅六錢
秀才記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
中等作文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢
美文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢
近松妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢
西鶴妙文集　發賣禁止
爲永妙文集　定價三十錢　郵稅六錢
芭蕉妙文集　定價廿五錢　郵稅六錢
立身冒險談　定價廿五錢　郵稅四錢

名流の家憲　定價廿五錢　郵稅四錢
社會學問答　定價三十錢　郵稅四錢
社會學と事業　定價七十五錢　郵稅十錢
超然教育學　定價二十錢　郵稅四錢
軍人と膽力　定價二十錢　郵稅四錢
軍歌集　定價十二錢　郵稅四錢
處世の歌　定價三錢五厘　郵稅二錢五厘
征露の歌　定價十錢　郵稅二錢
征露詩集　定價十五錢　郵稅四錢

| | |
|---|---|
| 小學高等科字引 一學年用 | 郵定 稅價 四十 錢 |
| 仝 二學年用 | 郵定 稅價 四十 錢 |
| 仝 三學年用 | 郵定 稅價 四十 錢 |
| 仝 四學年用 | 郵定 稅價 十四五 錢 |
| 中等國語讀本字引 一學年用 | 郵定 稅價 四廿 錢 |
| 仝 二學年用 | 郵定 稅價 四廿 錢 |
| 仝 三學年用 | 郵定 稅價 廿四五 錢 |
| 仝 四學年用 | 郵定 稅價 三六十 錢 |
| 仝 五學年用 | 郵定 稅價 三六十 錢 |

| | |
|---|---|
| 殘花集 | 郵定 稅價 二四十 錢 |
| 玉琴集 | 郵定 稅價 四二十 錢 |
| すみれ集 | 郵定 稅價 四廿五 錢 |
| 百字文集 | 郵定 稅價 四廿五 錢 |
| 忍ぶ草集 | 郵定 稅價 二四十 錢 |

高等美文資料 郵定 稅價 廿五六 錢

82.
596